

て、薩摩が幕府に断りもなく、出し抜いて出品したに就ては、幕府でも棄て置き難いと考へたけれども、當時幕府の威信は地に墮ち、それを責める程の威力も無かつたので、佛國の出先で争ふことになつたのである。全體、國に一つ以上の政府がある筈はない。薩摩が政府と名乗つたのは、藩の意味で、西洋の所謂ガバメントの意でなかつたかも知れない。現に肥前藩でも、當時肥前政府と云うた例がある。併し薩摩の當時の遣り口は、全く獨立した政府の態度で、尾佐竹博士から聞けば、薩摩、琉球の文字と、島津家の定紋を鑄た勳章まで作つて、佛人に與へたと云うてゐる。して見ると、薩摩政府と云ふのは藩と云ふ意とも思はれない。それよりも餘程超越して、ガバメントの態度であつたかに見える。當時幕府の状態はと云ふと、殆んど亡滅に瀕してゐて、其頃薩摩に左袒してゐた英國人サトウなどは、既に公然印刷物を以て幕府の亡滅を言うてゐる位であるから、薩摩の眼中には幕府は無かつたと見る方が實際であらう。否々それどころか、薩摩は幕府に對して異志があつたとさへ云はれた。それに就ては後に薩摩では種々辯疏をつとめ、大久保利通公の傳にはコンな事が書いてある。

當時幕府が萬事佛國にのみ依頼してゐたので、薩摩は、之が爲めに、或は日本が佛國に併呑されるやうな事があつてはと、心竊かに國家の爲めに之を憂ひた。そこで我國の組織が恰も米國の如き聯邦式の國で、其領土内に於て各州の自治政府を認めてゐて、必らずしも中央大政府と雖も、此の諸藩即ち各小政府を左右し能はぬといふことを、豫め佛國に知らせて置いて、彼れをして容易に日本を窺はしめない用心から出たものである。

と云うてゐるけれども、是れもどうであらうかと思はる。

兎に角幕府は佛の歡心を得ることを大切に考へて、博覽會へは將軍の親戚徳川民部大輔を特に派したのである。扱て佛國で薩摩の代人と落合つて、色々争つたが、幕府方の主張が案外に通らなかつた。其の仔細は、薩摩方の宣傳が旨かつたのにも由るであらうが、談判の衝に當つた幕府方の向山隼人はいつのかみ正一履（向山黄村）が、ガバメントの用例を誤り、大君の政府のみがガバメントで、他は、薩摩でも肥前でも政府と稱しても、それは藩の事で、ガバメントでないと言ひ張るべきを、薩摩政府も矢張りガバメントであるかのごとく云うたのが悪かつたので幕府の失敗に歸したと云はれてゐる。向山は此の不首尾のために終に本國へ召還さるゝに至つた。當時日本の状態も頗る混沌を極めてゐたから、外人に見別けの付かなかつたのも一概に

無理では無い。まして幕府の外交官は薩摩のそれよりも手腕が下つてゐたとすると、勝つべき筋が勝てなかつたのも無理はない。此の銅印は微物ながら、此の葛藤を記念するもので、岩下が薩摩の權力を背景にして、如何に此の印を振り回したかを思ふと、私は此の銅印に無限の趣味を感じざるを得ないのである。

雨の詩趣

ことしのやうに雨天の續いた夏は無い。十數年前にも雨が續いて洪水が起り、私は亡兒の看護をしながら、百水一滴と題して、水の趣を百則書いたが、ことしも亦それに倣うて水の趣を書き氣になつたが、大概前年書き盡したから、僅に詩趣に就て思ふ所をみだりに書きつける。

俳人一茶の句に「一升でいくらが物ぞ露の玉」とある。露は水の尤も小さなもので、其の玲瓏たる團々は淨珠の如く如何にも麗はしい。吾等も其價幾何と問ひたい氣がする。雨は草木百花を培ふものであるが、詩人が百花に生氣をもたせ光澤あらせるのも亦雨である。雨を藉り來

らねば、詩味も索然たらざるを得ぬ。曰く一簾疎雨杏花寒、曰く著雨杏花肥、曰く豆花雨後輕烟、曰く一研梨花雨、曰く冷露無聲濕桂花と、雨露を藉り杏花豆桂の風趣をあらはす處に妙がある。春漲一江花雨と云ひ、雨過落花紅半溪と云ふも、亦雨を藉りて花の風情をあらはすもので、風韻の横溢を覺える。樓臺橋梁なども雨を藉りて始めて風情をあらはす。曰く暮烟秋雨夜橋寒、曰く半雨半烟橋畔、曰く小橋流水人家、曰く殘夜水明樓。此等の句は宛として畫を見るがごとくであるが、若し水の一字を除き去らば句は全く平凡に墜ちる。平凡の家屋、村落、墳墓などに趣あらしめるのも亦水である。曰く水抱孤村遠、曰く江抱屋如浮、曰く清溪拱水荒涼宅、曰く野水齧荒墳と、水を配してこそ此等の風景を美化するなれ。夜水も亦甚だ趣あるものである。曰く近聽始知雙櫓響、一燈浮水夜船歸と、何たる清涼の情緒ぞ。水と云へば魚之れに隨ふ。魚に配して水は亦一種の風味を發する。曰く南山雨歇春流急、多少遊魚上淺沙、曰く一夜東風吹雨過、滿江新水長魚蝦と、魚に活氣を與へるは水の働きである、否、水字の働きである。或は雨を藉り感慨を抒ぶるものあり、曰く江雨夜聞多、曰く最難忘吟邊舊雨、曰く那堪疎雨滴黃昏、曰く夢魂猶在水雲鄉と、雨ほど人の感慨を惹くものなく、水郷ほど情味のあるもの

は無い。雨聲を聴くの快は寧ろ雨を見るの快に優る、曰く倚樹聽流泉、曰く西窓一榻芭蕉雨、曰く涼雨竹窓夜雨と。雨は殊に芭蕉に觸れ叢竹に觸れて風趣を生ずる。併し水聲の趣は、これだけでは盡きぬ。曰く谿聲勝管絃、曰く泉聲咽危石、曰く喚船々不應、水應兩三聲、曰く水不忘情去有聲と、水聲の情味を説き得て甚だ妙を覺える。水は比喻に用ゐてすら一種の趣を發する。曰く碧天如水夜雲輕、曰く桃花亂落如紅雨と。水は景物の半ばを占むるといふも誣言にあらず。水の崇高なるものには飛瀑がある。曰く瀑勢雷虛壑、曰く飛泉數點雨非雨、曰く瀑布杉松常帶雨、夕陽彩翠忽成嵐と。皆飛泉を形容するものである。若しそれ更に水勢の雄を語るの句を求むれば、曰く月湧大江流、曰く萬丈水聲落、曰く無邊落木蕭々下、不盡長江滾々來、曰く亂雲埋樹黑、驟雨壓峰低、曰く江流搖岸動、曰く潮到疑吞岸など、皆水を説いて甚だ力がある。更に海洋の景物に到つては、積水天に連り、濤勢山を崩し、澎湃奔放、其聲雷の如く、人をして坐ろに魂を消さしめる。水景の最も崇高なるは是れ。

家園雜興

新緑 初夏の新緑ほど心地のよいものはない。雨天に若葉が露にひたりながら、黙々として幾ばくづつか葉の太りゆくさまを詠めるのも一興である。自分の庭は百坪にも足らぬ猫額大のものに過ぎないが、楓樹や古木や八つ手や葛などが多いので、滿目若葉で清新の氣が漲つてゐる。花などよりも新緑の眺めはいくら見ても飽き足らぬ趣がある。樹の葉にはそれ〴〵持前があつて、生長すれば色もさま〴〵になり大きさも區々で、それが季節に依つて種々に變化するけれども、芽を發して僅かに葉の形をなした時は、どれもこれも略々同じで、遠くから見ると、積翠萬重で緑が滴らんとしてえも云はぬ風致がある。一つ〴〵の葉は清く新らしく、軟かで風にも堪へぬ弱々しさで、人間に譬へると生れて間もない嬰兒と一般、純潔うぶで、風霜勁雪の苦を全く知らないものであるが、活機は横溢して日に〴〵展びつゝあるを見ると、痛快の感に打たれざるを得ぬ。吾等は此の若葉の前途に多くの期待をもつと共に之れを祝福せざるを得ぬ。

得ぬ。そしてそれが發育して天を翳すの大葉となることを思ふと、肅然として容を改めて敬意を拂ふことにもなる。所謂る後世恐るべきものは、此の纖弱なる若葉である。われ等はいつも新緑を見る毎に此の感に打たる。併し、若葉が段々發育するにつれて古い葉が黄ばんで終には落ちる。その落ちるまで清新の葉に交つてゐるのが目立つて醜いので、毎朝例として黄葉を摘んで取る。丁度黒い髪や鬚の白毛をぬきとるやうなものだ。ある時はコンな事を考へたこともある。若い血氣のもの、中に老人が交つてゐたら、さながらこのやうに醜く見えるであらうかと、心窺かに羞ぢるの念なきを得ない。

野趣 庭園の樹木は杉其の他常盤木を喜ぶ。花樹の交るのは風趣を俗化して面白くない。成る可く野趣の漲るのが望ましい。私の庭園の池畔には葭が叢生してゐる。それを私が殊に愛するのも此の故である。しかし、あつて敢て妨げない花卉は、萩、茶、蓼、野菊などである。此等はすべて銜氣を帯びないので、野趣と牴觸することは無い。

朝顔 後園に植ゑた朝顔が蔓を延ばし、毎朝二三十の花がひらき、朝起きると紅紫さまざまの花が目を楽しませる。夏時はおのづから早起で、兎もすると五時に起きることもあるが、いつ

も朝顔の方が早く目をさましてゐる。新聞も朝のものだが、六時を過ぎねば配達して來ない。此物も、ある點に於て朝顔に似てゐる。朝顔が時たま思ひがけもない花を發するやうに、新聞にも往々意外の記事がある。朝顔はいくら眺めがよくても晝頃になると凋んで仕舞ふ。新聞で得る印象も亦似たやうなもので、毎朝讀過すれば、それ切りで何等の印象を残さないことが多い。雨つながら果敢ない運命のものである。想ひ起せば、往年自分が讀賣新聞社在社の折、創立十年紀念にと、紅葉山人の工夫で得意先へ扇子を配つたことがある。それには武内桂舟が朝顔を書し、上頭の縁に紅を抹して朝顔に擬へた趣向で、紅葉には新聞を朝顔に比した句もあつたが、それを書かずに、晝で其の意を寓したことがある。流石に紅葉であると感じたことなど想ひ起す。

夾竹桃 夾竹桃は家園にもあつて、ひどく枝が繁るから時には刈りこんで、花時を楽しんでゐる。此の花木の本國はどこであるかをよく考へたことも無かつた。實は支那が本國と極めこんでゐるから、深くも穿鑿もしなかつたが、吉江喬松氏の「南歐の空」を讀んで、始めて其の故郷が意外の處であることを知つた。即ち亞弗利加の沙漠のオーシスこそ、其の故郷で、これ

には無數に群がつて花を發してゐると喬松氏の目撃談が書いてある。さる熱帯地のものが、よくも日本に育つものよと今更に妙と感じた。寒中別に霜よけをしたこともないのに、餘程強い樹と見える。

墓 連日の雨がやうやく晴れて、始めて庭に逍遙すると、まだ土が乾かず、じめ／＼してゐる。名も知らない茸が茶室の苔上に叢生してゐるのを認めた。帚を把つて散つてゐる枯葉を無雜作に掃ふと、薄闇い樹陰こかげからノソ／＼と動き出して來るものがある。これは熱知の墓公であつた。人に依り墓や蛙をひどくいやがるものもあるが、自分は敢て愛するでもなく嫌ふでもなく、庭に時々出會つても一向構はず、嘗て逐拂ふことをせぬ。主人の寛大に慣れてゐるとも思へないが、いつも悠然として人が近いてもビクともしない。些しも遁けようとはしない。一體このものは鈍性に生れてゐるのか、無神経であるのか知れないが、人を恐れない圖太さは確かにある。人種に譬へたらスラーヴの性格があるとも云へるであらう。よく／＼其の態度を見ると昂然たる處がある。人に對して憶面なく何か語らんとする趣もある。一條の句に「雲を吐く口つきしたり墓ひさかた」といふがあるが、如何にも其の趣がある。小説家が之れを目して妖術あるも

のとして兒來也の寵を得たとするは偶然でない。彼れは大勇あるもの、如くである。大悟徹底してゐるもの、如くである。自分が稀れに塵埃や枯葉と併せて帚で掃ふことがあつても、素直に掃はれてゐる。或は支體が覆されて腹をあらはすことがあつても、苦悶狼狽の様もない。死容を粧ふのかと思つたこともあるが、強ちさうでもない。此の神經過敏の世の中に、彼れはさながらそれを嘲るかのごとく、沈靜の態度で傲然としてゐるのは見上げたものだ。

蝶 蝶には色彩の美もあり、其の飛舞の姿も優しく、花に配すると風趣もあるが、私の家族は之れを好まないの、吳服などに蝶の文様のあるものは一切用ゐることをしない。私は其の何故たるを知らず、亦其譯を問うたことも無かつたが、私も遂に嫌ひになつた。其の動機はと云ふと、毎年數竿の修竹が書窓の前に生え出ると、其の若い枝の張ると其の嫩葉の出るのを樂みにしてゐるが、漸く嫩葉が發すると、忽ちに縁なす色が白くなるので何故であらうと不審に思つてゐると、それが蝶の爲す業であることが知れた。蝶は若葉に子をひりつけて餌に供するから、漸く發した葉が枯死するのである。農家があの奇麗な蟲を敵とするのも私の家族が之れを厭ふ意味も分り、それからは此の蟲をひどく嫌ひになつた。

蛛網 私のまう一つ嫌ひなものは蛛網である。どうもこれがあると掃除が届かないやうな気がしてならない。朝起きて見ると屋角に張つてゐる。庭の細徑を行くと頭が此の網に引つかゝる。清淨を欲する茶人などは氣にして之れを掃ふやうだが、どんなに庭をよく掃除して一塵も留めないやうになつてゐても、蛛網があるとぶちこはしである。私は茶人の顰に倣ふのではないが、之れを氣にして毎朝拂はずには居れぬ。蛛子が營々辛苦して折角張るものを、容赦なく破壊するのは罪なやうでもある。考へやうに依つては、害蟲を拿捕するものであるから、斟酌を要するかにも思ふが、人間の感情は妙なものだ。蟲類が人間の感情の犠牲になるのは獨り蜘蛛のみに止まらない。

蟬蛙 夏時の盛暑に蟬の聲やひぐらしの聲を聞くのも一興である。あの小さな蟲が放つ聲は庭一杯に響き渡つて、高い調子の奏樂を聴くやうな感じがする。閑寂な處に之れを聴くと、音響が一層振つて氣を引立てるやうでもある。俳人が「閑けさや岩にしみ入る蟬の聲」と詠じてゐるが、如何にも巖にしみ入るかと思はる、ほどである。しかしよく其聲を味つて見ると、疎はあるが涼はない。實は暑熱の作用で發する聲に清涼を要求するのは無理かも知れぬ。夏の

蟲では蛙の聲が寧ろ優つてゐる。それは夜分水の中で發する聲であるから、涼し味が境遇からも起るべきで、靜夜に之れを聞くと清涼の氣は人の心を醒ますものがある。蔭なす樹下の水に蛙聲の満ちる時、水を汲むと蛙聲を汲むやうな氣がする。「村娘挈瓶去、柳外汲蛙聲」と云ふ詩があるが實況である。但し蛙にも聲の澄んで清らかなのと濁つたのがあり、人耳に可なる者は澄んだ聲で無ければならぬ。自分の舊宅には小池があつて、汚穢の水の中に若干の蛙がゐた。その聲が如何にも清らかで、夜中家前を過ぎるものは立ちどまつて之れに聴きほれたものである。今の家の池は數倍大きく水も清潔であるが、よい蛙がゐないので常に欲しいと思つてゐる。今の池に前のごとき蛙がゐたら、どんなに清涼の聲を發するであらうと、夏になる毎にそれを思ひ出すが、未だに獲ることが出来ない。さびた池には蛙はつきもので、池の趣を發揮するものは、魚よりも此の蟲であらう。蛙鳴は雨を呼ぶと云はれてゐる。暑時雨を呼ぶのは人に同感のある業とも云ひ得よう。蛙鳴蟬噪を惡しざまに用ゐるのは、蛙の爲めには冤である。蛙は可憐の蟲である。俳人が其の水を泳ぐさまを「およぐ時よるべなきさまの蛙かな」と云うた如く實によるべなき可憐のものである。

廢瓦

私は晴日庭園に出て徜徉するのが毎日の事で、筆研に倦んで時の如何に拘らず庭へ出る。出れば必ず帚を携へて、落葉や塵埃を掃ふ。掃庭は敢て自分を待つ譯でもないが、手ぶらでは時が費えないからである。庭を歩いて目に障るものは瓦片の土に交つてゐるもので、私の嫌ひのものである。大震災の際多く碎けた壁瓦が散らばつたが、それは一時に收めた。既に收め盡したと思ひの外、一雨を経る毎にあらちから出て来て幾んど際限が無い。私は何故か目の敵として見當る毎に引き取つて棄てるのが毎日である。私はそれを取りながら或る時フト考へた。自分は金石癖があつて、印を玩んだり古瓦を喜んだりしてゐる癖に、各故瓦を目の敵とするのであらうか、癡瓦と雖も亦金石の部に屬するものと。コンなことを考へると、端なく曲亭馬琴の日誌中の記事に思を馳せざるを得なかつた。馬琴の日誌中に、隣家の犬が塙根を破つて這入つて來たのを、馬琴は容赦なく、棒を揮つてサン／＼に犬を打ちすゑて追出したと

ある。或る人は之れを評して、馬琴は「八犬傳」を著し、失明に迫んでも筆を廢さなかつた程此の著述に忠實であつたのに、何故犬に對して一片同情が無いのだらうかと。瓦片は犬と違つて活物ではないが、自分も同じ譏りを招くであらうと一笑したこともある。

酒數則

酒を好む私としてお恥かしいことだが、いろ／＼の本を讀んで酒の事が書いてあると妙に私の注意を惹き、抄録の勞をも厭はんのが私の癖である。酒には忠實であると云うてよからう。

隨筆「壺蘆園雜記」の内に紅毛人おらんじんのことがいろ／＼記してある。其中に、日本の酒を懷妊の婦人に用るれば平産するとある。即ち原文を抄出すれば左の如くだ。

日本酒を、蘭人、昔しは十分に用ひ、尤堺酒也殊の外酔候由、近年十分に給べ候事を恥て、銘々少く用ひ候由

日本酒を本國へ持歸る事夥し、紅毛の懷妊の婦人用ゆれば、速に平産するとぞ、故に臨月に

は必らず用るよし

馬に下戸なく、藥餌に酒を和して用れば效あること、始めて養馬書を読んで知つた。

馬に下戸なし、藥を用ゆるには多く酒を和して可なり、常にも折節は飲して益あり、野ざら

しには酒を口に含んで吹かけてよし、肥すべしと思へばあまやひ醴を五六升も飲すべし。

などあつて、いろ／＼の藥劑を擧げてゐるが、皆酒に和する趣向なり、此書は寶曆版で、越前

の小川英長の著に係つてゐる。

昔しから詩人の酒に對する禮讚は少なくないが、アナクレオンに匹敵する吾が上代詩人を求めるならば、萬葉に其の什を残してゐる大伴旅人たぐよを推さずばなるまい。隨分徹底した大膽な禮讚をしてゐる。

價なき寶といふとも一杯の濁れる酒にあにまさらめや

夜光る玉といふとも酒のみて心をやるにあにしかめやも

古への七の賢き人ども、欲りするものは酒にしあるらし

此世にし楽しくあらば來む世には蟲にも鳥にもわれはなりなむ

中々に人とあらずば酒壺になりにてしかも酒に浸みなむ

あな醜くさかしらをする酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る

アナクレオンは曰く、誰か我が往く道を知るものぞ、世路は暗し、只酒のみは能く之を照さん、然らば我れ泡立つ酒を飲み、以て人生の道をねり行かん。彼れは又曰く、今日我れ生きて杯を傾けん、恰も明日のあらざるが如くに、明日とならば何かあらん、我又再び飲まんのみと。東西古詩人の歌、共に痛快を覺えるではないか。

私は酒舗で枡酒をひつかけのを痛快と感じ、既刊の隨筆に聊か其事を録したが、高村光雲翁が松江の名工如泥の藝術を紹介された記事を見るに、如泥も時々枡で酒を買つたとあるが、これは又驚き入つたことで、いつも五枚の板を懷ろにして酒屋へ出かけ、咄嗟に五枚の板を組み合はせ、釘一本打つでもなく、それに酒をなみ／＼と受けて、手に提げ家に還るに、其の板が外れたことは無かつたと。チョット信じかねるやうな話であるが、いつも不思議な技巧を弄して人を驚かした名人如泥であるから、一概に荒誕の説として排することも出来ない。

こゝに今一つ枡酒に關する小話がある。それは相撲協會で祝杯に用ゐるのが例となつてゐる

枿である。此の枿は由緒のあるもので、江戸時代の相撲會所から傳へたものと云はれてゐる。江戸時代には相撲會所の筆頭、筆脇二人が全權を握つてゐて、其他の年寄などは會所の會計を十分承知しなかつた。勿論力士連は一切損益勘定を知らず、又金錢の事などは面倒がつて聞かぬ事を欲しなかつた程淡泊のものであつた。しかし興行の利益勘定は毎年會所でやつて、其の配當金は小さな枿に盛つて頒配した。其の枿が目出度いと云つて相撲協會に引續がれ、之れを杯に充て、祝酒に用ゐてゐると聞いた事があるが、今尙此の枿は協會に保存されて居るかどうか。

足利尊氏に濁酒を振舞つたものは夢窓國師である。尊氏は濁酒に就て國師と和歌の應酬をした、其歌が存してゐる。尊氏は心を澄ます爲隱栖してゐる人が何故に濁酒を飲むかと難じ、

隱居して心をすますものならば濁り酒をば如何飲むらんと詠じたのに對し、

隱居して飲むべきものは濁り酒とても此世にすむ身ではなしと云うて返した。あの濁世にすむ身でないものはひとり夢窓國師のみでなかつた。濁酒を尊氏にすゝめたのには寓意がないであらうか。

本年の夏郷里に歸省した際、ある友人が旅舎へ訪ねて來た。此人頗る酒量があるので、近來の飲況を問うた處、輕症ながら中風に罹つて酒を廢してゐる。併し全然杯と絶交する譯にも行かぬと云ふから、晚酌にどの位飲むと聞いたら、多量に飲むことが出來ないので、晚酌は全然廢して午酒を飲むと云ふので妙なことを云ふと、怪しんで其故を問うて見ると、晚酌では、酔ふと直ちに睡るから如何にも勿體ない。僅かに飲む酒は晝に於てこそと答へた。成る程これは一説である。酒氣を味ふは寧ろ午酒にあらん。晚酌に酔うて直に倒るゝは快は快だが酒氣を翫味するの時間がない。酒は本來酔うて睡るのみが能でない。酒心地尤も味ふべしとすれば、此の友人は眞に三昧に入り酒を知り酒を愛するものと云うてよからう。

枕に就て

花朝の簫、月下の笛、霜夜の砧、爾なんぢに依つて能く聞く幾多の音とは成島柳北が枕に題した詩である。春の短い夜、秋の長い夕べ、シト／＼と降る春雨を聴くのも、庭にすだく蟲の音、夜

半の鐘を聴くのも、皆枕が媒介で、四季さまざまの聲が枕を傳はつて来る。枕は人間の最重要部の頭腦を安置する具で、人の魂魄が何かに宿るとすれば、枕が尤もそれに庶幾いものである。寢具は人に安息を與へるものであるが、中にも枕が尤も大切のものである。されば枕を高くして眠るのを泰平の象としてゐる。人を安らかに眠らせる爲めに、古來いかばかり枕に工夫を凝らした乎、悪夢を避けるには獮に夢を喰はせるとあつて、枕に獮を圖したりもした。ビールの睡眠材とされてゐるホップといふ蔓草は、古く枕に装置されたこともある。伽羅枕などいふものは、枕函に香爐を裝して香を燻らし、婦人の緑りなす長髪に芳香を移したのだが、これも人を愉快に眠らせる用意であつたに相違ない。意匠は百端で、長崎の圓山の妓樓には楊貴妃傳來の鶴の羽毛枕があり、夏時三伏の候には、陶枕たうちんや籐枕が工夫され、讃岐の高松藩の家老が曲亭馬琴に送つた枕も陶製で、今も存してゐる。物徂徠の遺枕は尙存してゐるが、それには戒房の説が録してある。支那の旅行者の枕は革製のカバンの如きもので、重器や貨幣が收めらるゝやうになつてをり、日本の旅行用の枕にも、折り疊むで懐中し得るものがあつたが、今はゴム製の空氣枕が出来て、一層簡便となつてゐる。

若しそれ枕の得難い時には、假寢に手を枕にし、肱を枕にし、旅行く人の野宿には草を枕にし、樹石を枕にし、舟人は浪を枕にし、讀書人は書籍を枕とする。書籍の内で細長い一形式を具した「枕本」と名くるものがあるのは、枕に代用するものである。軍人は戰場で戈を枕とし、獄中の囚人は木屑を枕とする。多數の雲水僧を宿すには、どこでも坊主枕の不足を感じ、長い材木を蒲團の下に忍ばして枕に代用することもある。

更に枕に就ての瑣事を挙げれば、自然、ヒギユアに枕の用ゐらるゝことや卑猥の事にも及ぶ。即ち忠節の士は城を枕にして國に殉し、橋は江に枕すと形容するが、墨江には現に枕橋といふのがある。枕詞は日本特有の掛け詞で、これに因つて和文が美裝されてゐる。枕を名とする名高い本には清少納言の「枕の草子」があり、平賀源内の戯著に「長枕しとね褥合戦」がある。遊戯には腕力を角する枕引があり、盜の一種に枕搜しがある。種々の營業のある中に枕商賣もあつて、旅舎と娼樓の枕には常主が無い。結婚當夜の枕が新枕と呼ばれ、閨房の喧嘩に枕が動もすると武器となる。都々逸子笑つて曰く、投げた枕に咎はないと。曾ては屋根船の棚に双枕を備へたこともある。之れを目して直ちに風紀に害ありとするは日本特有の神經性であつて、國に依つ

ては一向平氣である。支那の畫舫には必ず二つの床が敷かれ、双枕が並んでゐる。畫舫ばかりでなく、支那の政廳の應接所には同じい設けがあつて、主客枕を並べ、倦めば臥して語る習慣がある。コンナ莫迦げたことを舉げれば數限りもない。

枕は安息を與へる具であるが、往々安息に導き得ない場合もある。閨房の孤枕が如何に寂寞を感じしめることか。紅涙は滴々枕を濕ほし嫉妬の恚は焰の如く燃えあがる。閨怨は常に睡魔を逐うて煩悶の極に達せしめるものである。萬感の枕に集まるは旅中に多く經驗すること、罪ある人、憂ある人は、旅中にあらずとも枕で安息を得ない。しかし煩悶もさまざまで、詩人は枕頭に詩を得、藝術家は往々不眠の境に妙案を得る。英雄の大業も枕頭に案を得たことが決して少なくはあるまい。頼朝の霸業、豊公の雄圖、豈亦不眠煩悶の境より拈出されたものにあらずとせんや。常人は枕頭多く空想に驅られ勞して效がなく、英雄は酔後美人の膝に枕して容易に濟民の策を立つ。暗き牢屋に氷の如き枕と親しむ憂國の士が回天の業を策することのあるのも、世界決して其例は乏しくない。

西洋の詩人は睡眠を溫柔ソフトの襟母ナルスというたが、枕にも應用が出来る。病者に對する枕は、看護

婦よりも、或る意味に於て醫師よりも大切な役目を司る。長病人の晝夜間斷ない襟母はこれであつて、熱を解くには水枕があり氷枕もある。病人が枕に別を告げる時は、病の癒えた時と絶命の時であることを思ふと、枕は人間の壽命に關することが至大である。吾々は更に枕が人類の繁殖に關係あることを思ひ、更に枕があらゆる階級、貧富と云はず幼若と云はず、平等に溫柔なる襟母の職務を司ることを思へば、吾等は枕を禮讚するの念を禁じ得ない。

五山詩佛の好謔

菊池五山と大窪詩佛しふつは一時盛名を馳せた漢詩人であるが、爰に兩人地口ぢぐちを鬪はした滑稽の逸話がある。元來五山は讚岐出身で、詩佛は常陸の人である。五山は俗才があつて、酒席などでは機鋒當る可からざるものがあつて、往々人を洒落のめした。詩佛はき眞面目な人で、五山の敵ではなかつた。ある時詩佛は醉中破格に地口を弄し「狸爺たぬぢやい一杯やらう」と杯を指すと、五山は一氣にそれを飲みほして「鼬爺いたちぢやいに返杯する」というたので、詩佛はギャフンと參つた。タヌ

キは音「讃岐」に近く、イタチは音「常陸」に近い、地口掛合の佳對である。

無 舌

一時有名であつた落語家三遊亭圓朝に無舌と云ふ號があることを始めて知つた。そして山岡鐵舟が命じたものと云ふ。無我と云へば己れがなく天地と全く混融して一となる禪の極致である。然らば無舌といふも同じく舌を難れての妙を云ふのであらう。否、無舌の境に到らなければ、落語も妙境に入らぬといふ譯であらう。靴の適したるは靴を忘れ、衣の適したるは衣を忘れ、帽の適したるは帽を忘るといふ、忘るは無いも同じことである。詩などでも妙境に入れば韻を覺えない。舌あるを覺える間は名人とは云へ難い。

俗語の長所

私は俳句を解しないけれども、をりに觸れて古人の句集を讀み、點頭することがある。殊に一茶の句を好み、旅中には其の句集を携帯するが例となつてゐる。一茶の句は眞摯にして飾らず、率直に目前の事を詠じて、奇を弄せざる處に妙がある。斯様な句は平板に落ち、淺膚に流れ勝であるのに、なかく、含蓄があつて、平凡の裏に至理を寓するものがある。事新らしく云ふまでもないが、俗語ほど、強く且つ適切に感懷を言ひ現はすものはない。雅語はどうも孱弱に流れ漢語は鈍重に失する。國語の長は殊に俳句に見られる。就中、一茶は俗語を操縦するに最も妙を得てゐる。左の數句は即ち俗語の働きが漢語雅語よりも幾等上であることを思はせる。

明月や江戸の奴らが何知つて

おらが、世や牆根の草が餅になる

冷しさを我宿にしてねまる(坐)なり

親分と見えて上座の蛙かな

枯れす、き昔し鬼婆々あつたとさ

おんひら、蝶の金毘羅參り哉

今のめるまで花さく老木かな

世の中よでかい露から先づ落る

此やうな末世をさくらだらけ哉

以上一茶

麥の秋聲どのことし初めてじやの

あれくと櫓まら(櫓臍)外れてほとぎす

其角

此等の句の中で、おらが(我が)、ねまる(坐)、親分、やつら(汝等)、ジャノ、櫓まら(櫓臍)

など皆俗語であるが、コンな言葉が遣はれても些しも卑賤の感がしないのみならず、却つて力强

き跌宕氣分を漲らせる處に藝術的手腕もあるのだが、亦純眞の國語の長にも依るのである。

尙俳句に含蓄があり諷刺があつて、おのづから至理を寓するものを少しく舉げて見ると、

汚れ雪世間並には解けぬなり

朝顔も錢だけ開く浮世かな

露の世を押しあひへし合秋の花

苦の娑婆しほはや花が開けばひらく池

蝨のあとそれも若きは美しき

人をとる茸はたして美しき

かしましや江戸見た雁の歸りやう

以上は一茶の句であるが、他にも感吟に値するものがいくらかもある。

雪搔や我門きりの人ごころ

紀逸

白露や無分別なる置どころ

枯れてまで戦そまぎ忘れぬ薄すさかな

大晦日定めなき世の定めなり

西鶴

冬はまた夏がましじやと云ひにけり

鬼貫

絶景に金つかふべき所なし

葛枯れて我宿恥る柳かな

鬼貫

一抱へあれど柳は柳かな

中わるの隣から咲く蓼の花

竹頭木屑録

啄木鳥や枯木をさがす花の中

箔ぬりの佛も人の案山子かな

昔し英國の詩人バアンズは、自分の生れた田舎にゐて、故ら田舎言葉で詩を作り、それを都の檜舞臺に上せて、大喝采を博し、世界を驚かしたことがある。眞に痛快な事だ。日本では田舎言葉を一概に卑下するが、漢語は假り物で、純眞の國語は多く田舎言葉に残つてゐる。眞に肺肝を抉ぐる言葉はこれである。既に死んで枯骨となつてゐる萬葉言葉を呼び起してそれで新體詩を作るなどは、ゴムの靴を穿いて冠を戴くやうなものだ。なぜバアンズに倣はないのであらうか。

新潟の朝市

新潟の朝市は古くから續いてゐる繁昌の市場で、今も相變らず無くてはならぬものとなつてゐる。田舎から青物其他のものを持出して各戸の臺所に供給するのだが、丁度今日東京にある

公設市場のやうなもので、各家庭の主婦が自から其場に臨んで任意に買ひ物をやるのが慣例となつてゐる。自分の青年時代、新潟學校に寄宿してゐた頃には、朝早く此市を訪うて鶏卵や生薑などを買つたものである。市場は喧囂を極め、鼎沸の状を呈するが、そこに一種の郷土味があつて、追懐すれば多少の興味を感じる。一兩年前新潟に宿した折、朝早く人を訪ふ序に此の朝市を過ぎたから、態と立寄り、何買ふでもなく出陳のものを見、又之れを賣る田舎の男女が客と應答する言葉を聴いたりして、しみじみ郷土趣味を感じた。既に郷土の言葉を忘れてゐる自分として、その百分の一を言ひ現はすことが出来ない事を遺憾としてゐると、此頃明治三十五年頃の雑誌から田中小稻（オシネと訓む）の記のあるのを發見した。その記事はさながらラヂオで聞くかの如く、朝市の光景をよく描寫してゐて、新潟附近の物産の名から、郷土言葉で互ひに言ひ争ふさままで目のあたり見るが如くであるので、郷土言葉には注を加へて、に收める事とした。此記の著者田中小稻は本名を重平と云ひ、越後松ヶ崎に生れた人で、學殖があつたので、明治初年、新潟縣廳の役人となり、楠本正隆氏の縣令時代には今の知事官房主事と云ふが如き地位にあつて、常に縣令の和歌を添削したと傳へられてゐる。相當長壽を保つ

て新潟で歿したが、新潟では屈指の歌人である。

稲の目の、早や明なんとする頃ひより、朝毎にたつ市は、新津屋小路を中に置いて、其上下の
 衢々に、野山のもの海河のものを、市人の、おのがじ、肩に荷ひ背におひもて来て、道も
 せきまで、こてくくと押並べ、皆聲々に、おほやす、まけてやる、まけた、まけた、たゞやる、た
 だやると呼び立つるは、賑はしくも亦喧し。野山の物に名だ、るは、寄居地名の新潟の蕪、津島屋
 中蒲原郡大形村の内、青山葱、大郷茄子村の内、名目所郡内、ずんばい、果物、河渡郡内、西瓜、三條柿、新飯田
 郡内、桃、あるは瀬戸の鴨賣り、くねひの鉈豆、土手端の元なり南瓜も、我は顔に並び居
 たり。海河のものには、鯛、鯉、こつぺら、すけと、皆魚の名、鱈、きみ魚、かながしら、い、む
 ぼを始め、たら場蟹は、簀の子狭まげに廣がり居り、此外が、つなき、な、きさみ、焼島湯の
 雑魚には、お玉杓子も交るめり。是を商ふ人、金頭をか、げて片肌ぬぎ、肩を怒らせ、金切
 聲を立て、モシくおとうとく、お客さ、馬鹿うまうて、いどくお、馬鹿フットで、頗る馬鹿やすい格
 廉と、枕詞に馬鹿を冠せて、冠り振りく呼かくるは、此群の癖なるにや。呼び懸られし人
 は、少し振り返り、おらあ己、こないだ頃し、むぼも、金頭も、魚名よつばら飽くたと、足早

に過行くは、懐ろの寒きを見すまじとの負惜みならん。夕顔策を重げに荷ひ、ハイごめん
 く、ごめくくと、群立つ人を押分け通る、氣早の男あれば、おつこのや此ふと人ふん
 とに、本當につつかへて、觸れ、たまげさせられたと、驚かされた。打叩つ乙女もあり。周章たる様して、汝等
 又、もつと又、こつち又、寄つて又、居れとことえやれと、出しゃばつて、罵るは、其乙女の母に
 やあらん。女同志の行逢ひながら、おわらあ足だい町、新潟の下駄足のあばそんだだけだ、おば
 おれてんが、私とときで、粗忽も、そんな直ぐ、見忘れるてんが、お前そんてんが、かたね
 はや一向、來なんねてんが、來ら、あんにやさんも、先方の、あねさんも、先方の、達者だかねと、言懸られ
 て、お、だいきやいだわ、大嫌と云ふを案、坂内小路、新潟の、おか、だねい。先頃は大きに、謝禮
 ばちつきあがろと思ふて、つい、此頃迄ころくと御無沙汰しました。おつこのやでんがい
 て、躓、轉ぼうとしわと、何か、言譯がてらころく、云ふもをかし。鹽辛聲を振絞らして、
 鯉の昆布巻要りませんかいねと、賣り歩く媪の聲、いと哀れ氣に聞ゆ。とうがん、南瓜の列
 並たるを、あちこち見較べ、先のがんのにせうか、後のがんにせうか、いつち番旨そげな
 がんは、おいしげ、どんがんだらう、それだ、そつちのがん見せやえんしの見せ給へ、おや、賣れたがん

だけと既に賣却さ面無げに佇む女房もあり。洗芋あらいもほて箆をいさぶりかたげ、こつばかすの無いが是ば無りのにそつばか負けたつて引いて引いてどつばかの違ひがあるばえんと違どれほどの相ね價をこぎれば、こんがい此の様にこつたま有るが澤山あるのにあんがい事いふてあんなことそれがいつばい負けよんだらその様に多く値引をしたらどんがいとつさに叱られるやら知れぬどんなに良人に叱え、わんし宜し負ける事えんしと負けまあんがい、こんがいを數多つけそ附添て商ふも愛嬌あり。其傍らに商人同志にやあらん、腹立たし氣せみこま濁あ聲あ上あて、勘太、干瓢の勘定、今のこまこまにおくして呉れと即時いままはたは渡せ敦い圍ま促まれば、此方は、負けじと、口先を尖らかし、こんつけたの人中で此様の多人そんつけたの催促をしやがるそのやうの催促をするあんつけたの品押つ附けやがつてとあんなわるい品いさかひすまへば、此ずべ、ずべこべと、まつたくるか此言葉と立懸るを不明おんさ弟こじやくあい小癪なんしるがんだと押おふる人もあれば、其やろつたま野こすこつぺたい目に遇あせれとい目に遇はせよはけし懸るかもありて、打つやら、蹴るやら、追ふやら、走るやら、競ひよどみて、其日の市はさんがいた榮えた

斷髮令の悲喜劇

徳川時代には、元服をすると、前の髪を剃り落して頂點を綺麗に剃り、チヨン鬘ちよんを結ぶが例であつた。中に毛を存し置くことが士分では法度で、幕府では咎め立てをしたものである。それを維新忽々先づ風俗より改めよと斷髮令が布かれた。斷髮實行には到る處に滑稽談があつたやうだ。自分などはその頃幼少で、毎度結髪するのがうるさくて苦惱でもあつたから、斷髮を喜んで、模範的に一番早く實行した。その頃新潟の縣令は楠本正隆で、此の實行難にいろくくの奇談が傳へられてゐるが、多くは附會の説で、當時縣友であつた八木朋直は近頃まで存命で、其人の語る所が事實と思はる、楠本は模範を示すには先づ新潟の重立ちたる者に斷髮をさせねばならぬと、鮭網を引くといふに言寄せて甲乙丙の人々を舟に乗せ遊樂中、突然銘々の鬘を斷り放つたのには皆々一驚を喫したが、果ては一同笑ひ崩れたといふ。此件につき一悲劇の起つたことは、租税課長をしてゐるた舊幕人山田嘉重といふが、斷髮に乗じ一と儲けせんと少から

ざる官金を持出して、横濱に在る親戚に帽子、襟卷の類を澤山に買占めさせた。然る處利に敏なる商人の方が敏活に品物を取寄せて賣出した爲めに（山田の荷物が手間取つて到着しなかつた）山田の儲け仕事は全く失敗に歸し、官金私消の廉で遂に自殺を遂げた。これも八木の語る所であるが、八木は當時自家のチョン髻を切り落し、記念にとてそれを今も保存してゐる。

吾等（リンドパーク自傳の書名）

先頃自分共が經營してゐる文明協會で米國著名の飛行家リンドパークの半自叙傳を譯刊した。其の書名が *My* といふのである。日本語に「吾等」と譯する外はないが、珍なる書名である。此の飛行家が大飛行に成功した時大衆に迎へられ、祝辭を受けた答辭に、吾れとか私とかの一人稱を用ゐず、すべて吾等というたので、一人しか乗つてゐないのに吾等の複數を用ゐるは何故かと思ふものもあつたが、直ちに其意味が理解された。云ふまでもなく飛行機を人格化してそれと共にといふ意味であるのだ。リンドパークは流石に功を獨占せず、機の功を忘れな

い處に偉さがあると激賞され、爾來それが警語となつてゐる。自叙傳の書名に此の *My* を用ゐたのも此の故である。

如何に操縦が巧でも長途の飛行を果すことの出来るのは機の功多きにある。死生を共にせる機の功を閑却せず、これを共同者とした心根は優しくも亦麗しくもある。人情、死生を共にせる、人は勿論、犬馬の如き動物でも功を分つは寧ろ當然で、其例は敢て少なくない。機械とても亦同じことであるが、生物ならざる故を以て閑却することのあるのは誤りである。戰場に於ける軍器のごとき、それが勝敗の決を司るものとすれば、大將は士官兵卒の外にこれをも含めて吾等と云ふが當然であらう。誰れか身を護る刀を以て無刀の從僕よりも輕しと考へるものがあるらうぞ。文人に於ても、種々の藝術に於ても、其の功をなさしめるものは、筆研其他の器械に俟つは勿論で、筆の爲めに筆塚を作り、針の爲めに針供養をするが如き、皆其の功を忘れないからの仕向けである。兎角人は己れのみ功に歸したがらる。大衆擡頭の世の中、殊に共同を要する社會に於て、單稱を用ゐて功を獨占するは禁物である。リンドパークの複稱は眞に頂門の一針である。

外人と勳章

外國人は案外勳章をほしがらる。佛蘭西のやうな共和國でも、内々勳章をほしがり、暗に手を廻して外國から勳章をもらひ受け、ボタンの穴に有勳記章を挿んで喜んでゐるものが多いが、稀には勳章を拒む高人格の人もある。佛のブリアン氏の如きは頗る内外に功勳ある人だが、斷じて勳章を受けぬことが其人の信條となつてゐる。日本からも此人に勳章を贈りたいと考へたことがあり、先方の内意を探つた時に果して辭退したが、其の辭退の言葉が簡にして甚だ愛嬌がある。彼れは有勳記章を挿むべきボタンの穴を指して、願はくは此の穴をヴァージン（處女）たらしめよと云うた。

映畫の爲めの猛獸狩り

猛獸狩はスポーツマンが危険を冒して往々試みる事で、猛獸を捕獲するのが目的であるが、さにあらずして猛獸の生活状態を撮影するのを目的として猛獸に接近することが近頃行はれ出した。目的は異なつても危険は同じことである。活動寫眞に獅子や象や河馬やクロコダイルの類が場面に現はると、観客は冷然之れを見てゐるけれども、之れが裏面を考へると悚然たらざるを得ない。マーチン・ジョンソン夫妻が、阿弗利加で巨象の群を映寫した、其の實歴談を讀んで見ると、なか／＼の冒險であることを感ずる。目的が猛獸を殺すのでなく、その澤山の群と其の種々の姿態をそのまゝ寫すのであるから、頗る冷靜を要する。象も憤怒すると頗る猛烈のもので、あの面貌の温に似ない。其の體軀は彼れがごとく重いけれども、走るときはなかなか早い。ある時、百頭程の群にジョンソン夫妻が出會つた時などは、餘りに接近して彼等の襲撃を避け得ない難儀に迫つた。幸ひに夫人が發砲した、銃丸が前頭の象の眼を穿つた爲めに、全部の群が總退却を始めたので危害を免かれたとあるが、いつも良人が撮影役で、婦人が銃を取つての保護役、猛獸の種々の姿態を寫す爲めに、わざと象を驚かしたり脅かしたりする必要もあるので、それがなか／＼危険である。或る時は夫人が空に向つて發砲して象を驚かし

て見たともある。此のエキスベジションに偶然三十呎のクロコダイルを撮影し得たのを非常に喜んでゐる。兎角虎穴に入らざれば虎子を得ない。此の撮影は勇氣を要するのみならず、多くの費用を要するから、日本ではまだ試みられないやうだが、追々ジョンソン夫婦に倣ふものも出て来るであらう。

三白と赤化

讃岐は富饒の地で、物産が少からずある中にも、讃人の誇りとする産物は三種あつて、その色が皆純白である所から、三白と呼んでゐる。所謂三白とは鹽と米と砂糖で、何れも品質が精良である。海濱であるから製鹽業の發達するも自然である。砂糖は三盆の上製が古來各地の菓子製造家に喜ばれてゐる。米も讃岐産は評判がよい。斯く三白を始め、海産に富み工藝品も種々あつて、生活に苦しむものは少ないやうに聞いてゐるが、時勢は妙なもので、過般の總選舉には無産黨の首領が高松に踏み込んで鹿を逐うた。結局失敗はしたが、かなりの投票を得た

と聞いた。三白を誇りとする此境土に、赤化運動に心を寄せたものがいくらかあつたと云ふも奇である。同地の人に就て聞けば、讃岐には生活難があるでもないが、兎角流行を追ふ風があると共に、頗る物に飽き易い缺點があるので、無分別に赤化運動を助けたのだと云うた。先頃新奈須に遊んだ折、偶然高松の選舉に赤化排斥の遊説をした、知る人に出遇つたので、種々當時の事を聞いた。其際私は、讃岐は三白を誇りながら、何故に赤化などに左袒するものがあつたであらうか。多分、君の演説にも、三白が擔ぎ出されたことであらうと云ふと、其人は率直に、それは知らなかつた。知つて居れば無論責道具せめだうぐとするのであつた。措しいことをしたと、共に一笑した。

砂時計に感あり

電話機が鳴る。汽笛がひびく。呼鈴が鳴る。時計の齒がカチ／＼きざむ。家に在つても幾んど間斷なく雑音が耳に入る。外に出ると電車が軋る。自動車がうなる。飛行機が上空を飛び、

商家の店頭にはラヂオが種々の聲を發する。如何にも騒々しい世の中である。自分は前年北京（今の北平）に遊んで、其の巷の雜然たる人語を聴き、じみ／＼市聲は國の文野を表象するものだと感じ、文化の進んだ國の市聲は、人語や雜音が絶え、鐵の軋る音のみであらねばならぬと云うたことがある。しかし昨今のやうに、ラヂオに依つて種々雜多の肉音が市中に漲ると、私の市聲の説が裏切られたやうにも思ふ。かゝる騒然たる市中に住してゐる、私の書齋の案頭に唯一つ静かなものがある。それは英國製の砂時計だ。英國は流石に保守の國で、今でもコンナ物を製造してゐると思ふと購ふ氣も起るのである。此の静寂の時器、深夜人定まる時ですら、耳を澄まさないでは、砂の落下が聞こえない程の静けさ、今の文化的機械に對しては實に皮肉のものである。私の珍重する譯もそこにある。今の文化はすべて機械的で神経を刺激するもののみである。そして神経を刺激することが、往々人を殺すに到る。此頃ある少年がラヂオが耳について、寐ても起きてても、寸刻もその音に離るゝことが出來ず、自分は到頭之れが爲めに殺さるゝ、というて、警察へ駆け込んだと云ふことが新聞に見えたが、砂時計はコンな族の鎮經劑になるであらう。砂時計を豪味期のものと侮るを休めよ。今の文化の機械がやかましい音響を

發する間は未だ粗製の域を脱しないものだ。チト砂時計に見習つてもらひたいものである。

ペーパー・カッター

私は骨董道樂を廢めてから十數年経つが、まだどこかにその道樂の滓がこびり附いてゐる。近年各國のペーパー・カッター（紙切り）を蒐める氣になつて、しきりと漁つてゐる。日本、支那にも同じ様なものがあるが、西洋のと聊か其用を異にしてゐる。西洋では、小口を切らない書物が少からずあるので、讀書の際には必ず此物が要る。日本、支那には小口切らずの本は昔しない。（今は洋裝本に小口切らずの本もあるが）唯唐紙を切るなどに要するから、唐紙切りと唱へて、西洋のと稍ゝ似たものがある。

西洋諸國のペーパー・カッターは國々によつて其の趣が異なり、其の材料が異なり、其の製作が異つて、微物ながら各國工藝美術の標本と見られないでもない。矢張り文房の一で、机案の上の裝飾ともなる者だから、相當に意匠を凝らした者が多いが、日本には餘り多く輸入され

てゐないから、多く蒐める事が困難である。自分の蒐めたものはまだ三十點位しか無い。往年筆管の意匠の異つたものを百點集めた経験に比すると、此の蒐集は決して容易でない。大概世界の重なる國のものは手に入つたけれども、未だ甚だ憚らない感がある。

ペーパー・カッターの材料は金屬もあれば象牙もあり、又木や竹もある。西洋の紙は截り易いから、金屬でなくとも截れる。小刀のやうに銳利の刃は要せぬ。木でも、篋へらの如く薄刃であれば役に立つ。随つて製作は比較的單純であつて、截る處に格別變つた意匠はないが、柄には頗る意匠がある。英國では多く眞鍮を材料としてゐる。英國のガラスには一種の雅趣があつてよろしい。妙に無骨に出來てゐるが却つて味があつて、どこまでも英國流の堅實の所がある。柄にはいろ／＼のものが彫刻されてゐるが、人物では、シエークスピヤを始めいろ／＼の詩人、奈破崙などで、猶其他獸類を刻したのものもある。獨逸で最も喜ばるゝのはヘッケル製作のもので、英國の鈍製とは反對に頗る銳利の刃金を用ゐる、十分磨して、鏡の如くてら／＼してゐる。柄もおなじ金屬に種々の文様を淺く彫り、それに繪の具を喰はせたのが多い。奧太利のも稍々獨逸に似て居る。佛國のになると、流石美術國だけに垢抜けのしたのが多く、木を材料とした

ものに美人などを彫刻したものや、犬などを彫刻した者に云ふ可からざる趣味が存してゐる。伊太利の一特徴とも云ふべきは、木の細工で、柄には文様を打出しにした革で包まれてゐる。勞農露國のは木の細工が多く、柄には畫の描かれてゐるのが多い。私の藏してゐるのは、赤い衣服を着けた農夫が畑を耕してゐる圖が筆で描かれてゐる。概して質朴のものである。矢張り骨董同様時代を経たものに味がある。私の藏品中に、木製で柄に人物の像がある、一器は瑞西の作だが、頗る時代があつて、日本の文房に加へても調和するものである。實は此れが基もとで他を集め出したのだ。支那ものでは、竹製の唐紙切りと金屬製で七寶の柄のあるものがある。共に時代があつて古雅の味を感じる。近來日本で外國品を巧みに模造する爲め、いろ／＼のものが出來てゐるが、金屬で國々の特徴のあるものは模製にはない。象牙細工で埃及の文字を彫り付けたり、希臘式の人面を彫りつけたりしたもので、日本製か外國製か、一寸辨別のつきかねるものもある。私は日本の工藝家が西洋のを模倣せず、日本の人物其他さまざまの史實を材料として、特色のあるものを作つてもらひたいと思ふ。更に一步を進めて、紀念品などに、ふさはしい意匠を凝らした、此の器を人に贈るの習慣の起ることを欲する。

小口切らずの本を自身で切り離つて讀むのは面倒のやうでもあるが、丁度揮毫の前に自から墨を磨ると同じ趣があつて、敢てわるいものでない。墨を磨る間に字や文の工夫も自然起つて、磨墨を楽しむとする人もある。小口切らずの書物をペーパー・カッターを以て斷截するのは一層趣がある。第一、小口が切られずにあるのは、其の書物のヴァージンであることを表明するもので、己れに先んじ何人も觸れたことがないと云ふ處によい氣持がする。すべて或る程度の秘密は人の好奇心をそゝるものであるが、小口を切らない書物は錠が掛つてあるやうなもので、斷り離して見なければ、何が書かれてあるか知れない。其の知れない處に楽しみもあり亦興味もある。随つて讀み随つて斷截して行く内に、意外な挿畫が現はれたり、大議論の題目が現はれたりする事は、なか／＼に興味をそゝるものである。人々の習慣で讀むに随つて追々斷截して行くのと、一舉に切り離つて後讀む人があるが、私は前者に左袒するものである。小口切らずの書物をして云はしめたなら、必然、讀む人だけ切り離して欲しい。然らずんば、他の讀む人の爲めに、其儘にして置いてもらひたいと云ふであらう。

東西文明の調不調

東方に東西文明の調和を説く政治家大隈老侯あり、西方に東西文明の調和を不可能とする詩人キプリングがある。キプリングは曰く、

Oh, east is east and west is west, and never the twain shall meet.....

嗚呼、東は東、西は西、此の二者決して相逢はずと。日本を見ての此の詩人の觀察は如斯で、其の告白は甚だ大膽である。由來詩人には偏見が多いのに、人種的偏見が手傳つて日本を見るから、往く所として不快ならざるはなく、何もかも疵だらけに眼に映じ、日本を罵倒し盡しての斷案が、前の如くであるが、かゝる偏見詩人は決して大詩人でない。大詩人は必らず一世を風化するの抱負と雅量が無ければならぬ。此の條件を以て判ずれば此の詩人の如きは落第者で、大隈老侯の着想は流石に幾等か高い。

哲學者流の撞着

李白の詩に「言ふものは知らず知るものは黙す、此語吾れ老君より聞く、言ふが如くなれば老君は是れ知る者、何によつて自ら著はす五千文」と云ふがある。これ、言ふまでもなく、老子が不言を賢なりとしながら、五千言を費して「道德經」を著はした撞着を皮肉つたのである。兎角古くより哲學者もおシヤベリの爲めに遣り損ふものが多い。ニイチエなども恰もおなじい遣り損ひをやつてゐる。彼れは極端なる主我説を主張するもので、利己を知つて利他を知らぬと自白してゐる癖に、其の主張を滔々と辨じ、書を著はして盛んに宣傳したのは何故であらうか。彼れが自説の廣まるを望み、その行はれんことを欲したるは、これ取りも直さず利他の所業にあらずや。極端なる利己論者は、黙して自家の秘密を明さざるこそ本意ではあるまいか。老子の撞着はニイチエにも繰返された。當時此の撞着を摘發されてニイチエも困り、遁辭を設けて云うた。吾れの之れを云ふは、世間に行はんとするにあらず、さながら欠伸の如く、

又放屁の如く出るのだと。ニイチエも亦窮せる哉だ。假りにニイチエに對し其の遁辭を許すとするも、其の門流が囂々之れを敷衍し宣傳し、毫も自重しない、其の撞着は笑ふべきではあるまいか。

鰻 道 樂

鰻の道樂にはさまざま、おもしろい話が傳つてゐるが、中にも破天荒なのは、曾て海軍少將であつた柳檜悦氏が、其の隨筆に書いてゐる、左の事實である。隠れた逸事であるから爰に紹介する。

むかし天保の頃、藩の用人に湯淺某といふ鰻すきの人ありけり。東海道の旅に、俎板、庖丁、錐に焼火針、木炭、醬油など合羽籠に入れて荷はせ、鰻は所々にて買ひ得て、自ら調理して食ひ侍りしとぞ。此の人おのれが十四五の頃眼しゑに成られたり。鰻のとがなりなど人々云ひはやせり。其頃用人は供二十人餘りも連れ、槍、ハサミ箱、引馬などを具する身柄の人な

るに、みづから庖丁を取るなどいふことは奇と云ふべし。鰻道樂もこゝに至つては壓巻である。

魚類の飛行機運搬

飛行機が郵便を配達したり貨物を運送したりするやうに實用の具となつて來たので、此頃大阪から來た人の話に、中國から鯛を飛行機で取り寄せて鯛の會を催したと云ふを聞いたが、如何にも速力が早い上に、塵埃を絶する上空を慕しくらに運んで來るのだから、甚だ氣持がよい。いつぞや河豚を下の關から氷づめにして取り寄せた時などは、汽車に託したので多少の故障を生じたが、遠距離から魚類の如き生物を取寄せるには飛行機に限ると感じた。銀座の某店で近年初めたアドサトルといふ魚類の乾燥法、あれには越後の石油地にある一種吸力のある土を用ゐて、乾燥すべき魚類を間斷なく運轉してゐるが、あれも至極調法である。天日で乾燥するとなると、雨天では出來難い、自然塵埃が交る、蠅などが集まつて不潔を免れないが、

此の乾燥法は夜中でも行はれるし、不潔は全然ないから、甚だ氣持がよい。

燕巢と同趣の食物

燕巢は支那料理に尤も珍とする所だが、實は燕が魚を嚙んで唾と和し、巖のクボミに貯藏したものと正體が分ると、餘りよい心地がしない。日本には燕巢はないが、鳥の作つた食物を盗み取り來る點に於て、全く趣を同じうする者がある。それは「みさごの鮎ずし」と名ける、一種の鹽辛である。鶯と云ふ鳥が鮎を食つて、其餘りを巖の窪みに貯へ、それに小便をひりかけるのだ。此鳥の小便は甚しく鹽分に富むので、自然防腐の作用をもなし、通人は珍味として好んで喰ふと、松川二郎氏の「名物を尋ねて」の内に出てゐるが、産地は九州邊と思はるれども明記してない。

賣品にあらざる賣品

徳川時代に旗本、御家人の株が賣買され、與力の株も賣買された。これは幾んど公然の秘密であつた。幕末の亂脈時代だから不思議はないと云ふ人もあらうが、官職爵位の賣買は支那ばかりと思ひの外、我國でも現に勳章が賣買されて、賞勳局總裁が獄に繋がれた。政黨内閣で閣員を定める場合に意外の人が入閣すると思つて、裡面を探ると、その人が巨額の黨費を出してゐるからだと云ふ。これも金で大臣を買ふやうなものである。支那では顯官の價が凡そ定まつてゐると聞いたが、今は支那を嘲る譯には參らぬ。神社、佛閣なども賣品であらう筈がないが、事實賣るものもあり買ふものもあつて、およそ相場も定まつてゐると聞いた。相場は何に依つて定まるかと云ふに、信者と賽錢の多寡、財産の如何によつて定まるもので、其の賣買の法は神主や住職が金を取つて地位を譲るのである。華族の賣買の行はれるのも亦同様で、貧乏華族は持參金の豊かな養子に襲爵せしめることがある。これは恰も御家人株を買ふと一般で、事實

上の賣買であるけれども、現在はさまで目立たないが、華族が墮落するとこれが盛になるであらう。支那の學生は日本に来て金で卒業證書を買つて戻り、日本の學校を學店だと嘲ると聞か、紀律のない學校は學店と評されても辯疏が出来ない。獨乙あたりでは料金を受けて卒業論文を代作する職業があるといふから、卒業證書の賣買もある筈である。それ所か、學校にも往賣り物があるとかで、此頃も其の實例を聞いた。兎角金次第で大抵な目的が達せらるゝ。鐵道を收賄で許可した事件は、前鐵道大臣の繫獄で人の耳目を聳動したが、これも一種の賣買である。他の道路、港灣、會社、取引所なども皆賣買される。さうして人間も往々其心を賣り主義を賣り、恬然たるものがある。淫婦が節を賣り、娼婦が情を賣るは常套の事で、賣買は人間にまで迫んでゐるが、更に賣買の手は氣候にまで延ばされてゐる。夏時の避暑、冬時の避寒は手近い例で、此の目的の爲めに家を離れていろ／＼の處に行き、狭くらしい室に收つて窮屈を忍び、多く金を費して意としないが、これなどは宿屋住居を喜ぶのではなく、氣候を買ひに行くのである。かゝる土地の宿屋は實は氣候を賣るの商店である。

雅邦の當意即妙

橋本雅邦翁は畫界の偉人で人格の高い人であつた。茲に翁に就て珍な話がある。或る時貧書生が翁を訪ねた。翁は例の謹厚の態度で、何用かと聞くと、一枚、畫を書いて戴きたい。實はそれを或る方へ持參すると金に代へてくれますからと、露骨に云ふので、翁は氣の毒に思つたか、即座に紙を展べてさら／＼と書いて與へた。それは橋の下に蓬髪もへの男が跪いて、首を低けてゐる圖で、誰れが見ても先づ高山彦九郎が三條の大橋に跪いて宮闕を拜する圖と判するのだが、實は、斯く見せて、別に皮肉の意を寓してゐるのだ。即ち橋下に低首してゐるのは畫を求めた書生本人で、翁の姓は橋本であるから橋をあしらひ、橋頭に哀を請ふ奴といふ目前の景を描いたのである。高山彦九郎らしく見せた處、如何にも當意即妙で、おのづから諷する所のあるのは流石に翁である。此の圖は藝苑の珍とされ、舊友近藤仙太郎氏が藏して居る。

外人の見たる男色の惡風

ケンプエルの江戸參府紀行は千六百九十年即ち我が元祿三年東海道を経て江戸に到る記で、當時の風俗が描かれてある筈だが、外人の筆に成る紀行に多くを望み得ないのは勿論である。吳秀三博士の譯本を此頃其の心して讀んで見ると、僅かに男色に關する記事が見當つた。それは清見寺附近の所見を書いてゐる中に、幾軒かの茶店が膏藥を賣つてゐる。その賣子は十歳乃至十二三歳の美少年で、何れも紅粉を施して立派に装うてゐる。これ賣子を装うて實は男色を好むの客を待つものである。ケンプエル一行の檢使役たる日本官吏は、始終嚴格の態度を持ちながら、此處に來ると、特に駕を下つて茶店に憩ひ、美少年を侍らせて小半時休憩こはんときしたことを記し、不良の風俗を摘發してゐる。元祿の男色流行は海道筋にまで及んでゐて、それが外人の看破を免かれ得なかつたのは實は怪しむに足らない。

不自然な脚色

元祿頃の演劇の脚色が、今から見ると、如何にも幼稚で不自然で馬鹿／＼しいものが少からずある。こゝに其一例として、いっぞや道遙坪内博士が語つたことを思ひ出して、大略舉げてみる。頼朝や義経、其他源家の豪傑連の人形を船に載せて、團十郎が片手で持上げて舞臺に出ると、平家の幽霊があらはれ出て、船を取捲くと云ふ趣向で、如何にも馬鹿氣てゐるのを、大人がをかしくも思はず之れを觀て打興じたとあるが、案外である。その頃ある人が團十郎に向つて、いくら人形だから輕いにせよ、片手で差上げて出るなどは餘り人を愚弄するではないかと詰ると、團十郎は冷然として、両手で差上げたとして、眞の人間や船がさうやす／＼と持上げるものでないから、五十歩百歩であるというて、改めなかつたといふ。成る程團十郎の言ふことに却つて理があつて、失は團十郎の仕打にあるのではなく、脚色にあるのだ。しかし元祿より遙か後になつて、頼朝、義経の廓通ひを脚色した芝居を、興がつて觀たことを思ふと、元

祿の昔しを咎めるのは野暮の沙汰かも知れぬ。

江戸奴の大言壯語

江戸の言葉は封建時代の覇府に於てやかましい空氣の中に自然發生したもので、一種無類である。曾て此事を坪内逍遙博士と語り合つたことがある。博士の云はるゝには、江戸兒の大言壯語をなす時の言葉などは多分町奴まちやつこに系統を引いてゐると思はるゝ。かのペランメーと云ふ言葉などは町奴の面影を語る名残りとも見るべきである。當時町奴が遣つた言葉を知らんならば、助六などの臺詞せりふを讀むと、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。彼等の大言壯語は文學者に教はつたのではない。全く自家製造と見るべきだが、實に奇想天外より墜ちるの概がある。辨天小僧の云々する壯語の如き、如何に奇なるかを見よ。「俺れが名前を手の平に書いて、三度戴いて嘗めよ。花街くわいに入つて嫌はれる氣遣はない」と云ふ如き、如何に思想の奇なるよ。彼等の頭腦には勿論教育は微塵もない。其の思想に誤りないとは云へぬ。併し彼等の頭には些しの拘

束がなく、先例だの規則などは全然ない。若し彼等の特徴ある言語を縦横に發達せしめたなら、或は浮世繪の如く、一種の異彩を放ち、長く保存されたかも知れないのである。貞享の町奴唐たう犬權兵衛が法廷へ喚び出され、何故に汝の名は唐犬と稱へると問はれた時、權兵衛ガンドウ返へしに「今の將軍綱吉公が館林に在らせられた時は右馬頭で、將軍になられてから、犬公方と申上けるは如何に」先づ將軍家の犬馬の由來を承つてから、唐犬の由來を白状しませうと云つたときは彼等の意氣の一斑で、法廷に於てさへ如此である。彼等の壯語は其の意氣の現はれで、眞に極點に及んだと云ひ得よう。

梅曆の中の通客

爲永春水の著はした「梅曆」に書かれてゐる通人津藤と云ふは、假設の人物であるとはかり思つてゐるが、それが實在の人であることを、森鷗外氏の「山房札記」を讀んで初めて知つた。今京橋區である山城町に攝津國屋藤次郎といふ大きな酒屋があつたが、その主人が即ち「梅曆」

に在る津藤で、姓を細木と云ひ、相當に俳諧などをやつたので號を龍池と云うた。此人が富饒に任せて盛んに花柳界に遊び、通人を以て自から許し人も亦許した。勿論多くの取り巻きもあつたが、「梅曆」の作者春水も亦其一人であつた。「梅曆」はそれから材料を取つたので、餘り潤飾を加へず、其儘書いてゐるらしい。龍池も、それを書くことを敢て厭はなかつたと云はれてゐる。龍池の子に、子之助といふ親優りの遊蕩家が出て、一層の豪華をやつた。此男も相當に文學があつて、香以の名で知られた。當時の文人、俳優などで、香以の幫間をやつたものが少なくなかつた。鷗外氏の書いたものを見ると、香以の經歷は全然遊蕩傳で、其遊蕩振りは鹿島清兵衛に優るとも劣りはせぬ。親の龍池も兒の放蕩を制しかねて、終に産を破るに至つた。鷗外氏は、妙な縁因で、氏の團子阪の住宅は、香以の身内の人の家を買つたのだといふ。尙又芥川龍之助氏が、香以の親族であるといふも耳寄りの話である。

美術として見た女帯

西洋の美術家も追々日本美術を理解するやうになつたと見えて、日本婦人の帯を觀て感歎措かずといふ話を聞いた。彼等が驚異を感じるのは、絢爛華麗の文様もんやうや織様でなく、彼れが如き尺八寸の幅、丈一尺といふ長さに驚異を感じ、且つ感歎するのである。趣味を離れて實用一方から見れば、帯の丈一尺の大部分は隠れて仕舞ふのだから無駄だ不經濟だとの觀察もあるべきだが、美術としての觀察は全く別である。外國の美術家が日本の帯を鑑賞するは何れの點にあるか、未だ委しく聞く事を得ないが、日本婦人の服装と日本の趣味を理解するに於ては、帯に就ても讚美を禁じ得ない筈である。帯を腰に巻きつけて背後に結び、其の餘りをゆつたり下げたり、或はお太鼓に後ろを飾つたりするには、どうしてもあれだけの長さが要るのである。又胸下を飾るにはあれだけの幅も要るのである。隠れる所も顯はれる所と差別なく絢爛の美を極めるのは、含蓄を重んずる日本のゆかしい趣味から來るので、解く時も結ぶ時も人前に於てして少しも恥づるところがないやうに織られてゐる。潜在の美に重きを措くは愚だと云はゞ、下着などのやうに人の見ないものは美でなくともよい譯であるが、その隠れた所に趣向がある處にゆかしさがあるので、それを解せねば日本の女装の趣味はわからないのだ。通人の好みは、

外装を粗にしデミにし、内装を美にするのにある。ゆかしみを貴ぶのは高尚な趣味である。帯は女装の中樞であるから、之れに意匠を集中するのは決して偶然でない。帯は女の寶である。多くの價が之れに拂はれる。呉服商の儲けもこれに在りと云はれてゐる。精を盡した帯となると、二百圓のものを三百圓というても通るのである。外の反物と異つて價の標準がわかりかねるからでもあるが、一つは女流の嗜慾がこゝに集まるからでもあらう。或る人は云うた、價の知れかねる者は帯と古銅器で、商人の儲けは此の二つにあると、如何にもさうだ。呉服屋の宣傳を見ると、帯は室内の衣桁にかけて置いて飾になる、さながら元祿時代の花見に小袖を花見の幕に掛けたやうにとあるが、これは寧ろ窮した宣傳で俗氣がある。そんな窮した理窟をつけずとも、帯は装身具として十分の價值がある。

文晁の進學圖

谷文晁の自筆稿本進學の圖といふを郷友から示された。戊午十月文晁製とあつて、圖中には

種々注が施され、往々塗抹した處もある。全く文晁の工夫から出た構圖と思はるゝ。そして文晁が藝術の訓練に就て抱いてゐた考がさながら其口づから講釋でも聞くかの如く感ぜられて、種々の作品などを見るよりも興味があるから、爰に大略を録する。

紙面の下部一隅に唐めかしい門があつて、門外に立つてゐるものが三人、門に入つて人に揖してゐるものが一人ある。門内には圓形を畫いた道路があり、中央には湖水があつて、道の窮まつた一端に雲に駕して上天の人を畫してゐる。これが名人に達した者を表象したのである。門に入つてから、道路を經、或は湖水を涉つて、駕雲上天の目的を達するまでには、種々の曲折障礙があつて、それがすべて畫になつてゐる。先づ門を入つて僅かに數十歩にして、二人が遙かに駕雲の人を指さしてゐるのは、それに倣はんとの意氣を起したものであつて、又少しく行き、路上に佇立して遠く望んで思案するもの、あるのは、捷路を工夫するものである。船に乗つて前岸に到らんと擬するものがある。即ち捷路を求めんとするもので、一人、遂に意を決して船を漕ぎ出したが、泥濘が深く進みかねて困しんでゐる。捷路には通例かゝる困難が付きものであることを示したのである。道路の或る地點に横に通する一岐路がある。二三人其の路

に入る。注を見るに、本道を閑却して横徑を選んで得意とするものあれども、終に上手の域に到る能はずとある。之れに反して本道を辿り悠々として行くものあり、早駕籠を促して馳せ行くもある。注には、資力を頼んで早く上手の域に達せんと焦せる者あれど、如此は目の學問をこそすれ、業は拙なり。大名金持の藝がこれだとある。一人、駕籠に先きだち蹣跚としてよろめき歩くものあり、これは進行中精力盡きて路頭に斃れんとするものである。此人よりも遙かに前進し、幾んど彼岸に達せんとして彷徨する者がある。これは自負が起つて安心が氣ざし、僅か一步の處で彼岸に達しかねてゐるとの注がある。駕雲上天のものは、名人に達しても自負せず、益々勵むが故に、紫雲たなびき神女に迎へられて上天するの光榮を得るなりとは此圖の大略で、中學程度の讀本などに、挿繪として取り込むのにふさはしいものと感じた。

登山具を見て

毎年夏に入つて登山期になると、新聞の登山記事が日々私を刺激する。性來登山が好きで、

若い頃は夏期に一つや二つの山に登らねば気が済まなかつた。近年は登山熱が高まり、登攀法も進み、登山具の如き、私共の知らない便利のものがいろいろ出て来る。登山期になると、大きな商店は宣傳窓にそれを陳列するのが例となつて来た。私が登山具の陳列されたのを見た内で、尤も意匠を凝らした商店は神田の表通りであつた。高山の状態を見せる爲めに白樺の樹木が植ゑられ、種々の高山植物が樹下に叢生してゐて、其の樹木の中に白樺で作つた山小屋が其の一面を顯はしてゐる。そこには疊んだテントもあり、樹の枝には帽子が吊してあり、ピッケルもあれば背囊もあり、アルミニウム製の軽便な種々の食器もあれば火器もあり、ウキスキーや、種々の罐詰、藥品などの類に至るまで、凡そ登山に必要なあらゆる物が不秩序に置かれて、さながら實境を寫し出してゐた。私は店頭で足を停めて徘徊する能はず、坐りに神馳せ魂飛ぶの情を禁じ得なかつた。しかし最早や山を征服するの年輩でないことを私かに歎じた。

會て大隈老侯の晩年に横有恒氏を文明協會に招いてアルペン征服談を聞いたこともある。登山家として横氏と共に有名である朝日新聞記者藤木九三氏の編輯に係る「山の呼ぶ聲」と云ふ一書を文明協會から破格に出版したこともある。此の書は世界の巨嶽の圖を六十枚收めたもの

で、一部の高山譜である。山々が永久に融けやらぬ雪を以て埋つてゐるから、此の山譜は又一面雪譜でもある。山を不思議の怪物と云ひ得べくんば、此の書は怪物譜である。一枚々々繰り明けて見れば、山容皆異なれども、萬斛の涼味が紙中に漲り、膚に粟を生ずるの思があり、世界の群嶽が打寄つて何かさ、やいてゐるかの如き感もする。此の譜に對しては今更ながら人間の渺小を覺り且つ恥ぢるの感なきを得ない。

今は夢ならでは此等の山を跋涉することが出来ない。しかし這般の書を見ると、汗を流して山に挑戦するよりも却つて興味がある。此の「山の呼ぶ聲」の著者も其の緒言にノルマン・コリーの言を引き、「登山家の生涯を通じて最も貴重な時は、山の巨人に對して戦を挑んでゐる時ではなく、寧ろその惡戦苦闘を終へ、すべての事件が過ぎ去つた後、再びキャンプ・ファイヤを圍んで、靜かに回想に耽ける時である」と云うてゐるが、登山家の冒險談を靜かに讀んで味ふのも銷夏の一興で、必らずしも老を歎ずるに及ばぬ。

悪客

紅葉山人在世の或る歳の正月に、年賀の爲め牛込横寺町の宅を訪ねると、例の三階の書齋に導かれた。既に一二の客があつて祝酒が出てゐた。先客は私と交りのない人であつたが、一人はなか／＼の酒豪で、酒嫌ひの主人をそつちのけにしてお互に氣儘を吐き、酒が盡きると、主人に請ふまでもなく、私の酒敵が手を鳴らして酒や肴を取り寄せるといふ無遠慮には、主人よりも私が先づチト遣り過ぎると思つた位で、さん／＼に席を荒して去つた。其の途中に山人はさぞ迷惑であつたらうと感じた。

それから数年の後に山人が亡くなつて、硯友社から山人の遺書を出版することになり、日誌をも版にすることゝなつた。丁度その頃小波山人に出逢つたから、談ははしなくも日誌出版の事に及び、小波氏の言ふには、紅葉は日誌に随分人を罵倒してゐる。あの食通だから、人から寄せた食物が氣に喰はぬとさん／＼悪口を加へてゐる。どうもそんな所は有りの儘出しかねる。

ので筆を加へることを餘儀なくされたと言はれた。私は其の時、日誌は有りのまゝの方が面白い。紅葉のは別してありのまゝであつて欲しいと言つたが、小波氏は「それは勿論だ、罵倒されても意に介しない友人に就ての事には毫も筆を加へない」と言つた。

それから月餘にして出版になり、逸早くそれを購うた或る知人から一枚の端書が舞ひ込んで來た。何かと思つて讀むと、吾等を新年の悪客と罵つた一節が抄録されてあるため、私は一讀一笑を禁じ得なかつた。

此事は既に舊聞に屬し、全く忘れてゐると、昨年の夏、所謂悪客の一人と名乗りを揚げた人に邂逅するの喜劇が起つた。昨年報知社が、梨本宮殿下を總裁に仰ぎ、浮世繪展覽會を開いた折の事である。私も委員であつた關係から、前日殿下に召されて其邸に伺候し、茶菓の饗應を受けた。其際しきりに斡旋してゐた宮内の宮内官があつたが、言葉を交はす機會もなく、その日は退出したが、展覽會が終つて報知社の慰勞の宴に臨むと、この宮内官も亦席にあつた。宴會が終ると、この人が私に向つて「あなたは私をお忘れですか」と言はれるので、その人の風貌を見直しても、どうも思ひ出せないで、どきまぎして、前日宮のお邸へ召された折の禮

などを陳べて、お茶を濁して居ると、その人は破顔一笑して、紅葉が新年の悪客と罵倒を浴せられた其の一人であるとの白状で始めてわかり、私も哄然たらざるを得なかつた。その人は三雲敬一郎氏で、和歌山縣の人である。偶々紅葉の「十千萬堂日録」を翻して見ると、明治三十四年一月二日の記に、

市島氏來駕せしが、余の睡中なる由を聞き、かへりにとて去る。(大隈伯へ拜年に赴ける也)

十一時頃市島氏來る。(中略)佐藤、三雲の二氏來る。午後四時に至るまで、佐市の二氏盃を置かずして盛に獻酬す。余倦むこと甚だしく、二氏を罵りて新年の悪客となす。春城子曰く、君に一つの疵あり、飲客を遇するの法を知らざる事是なりと。或は然らん。這是余の堪へざる事の一也。

これに依つて見ると、三雲氏は共犯なれども、幸運にも山人の筆誅を免れてゐる。畢竟、今宮家に奉仕し得るやうに、吾等よりも品藻が高いからであらうと、一笑した。

震災當時の思ひ出

大震災の際の思ひ出が一つ浮んだ。あの際には私の宅は火災を免かれたが、玄關と、それに沿ふ處が傾いた。私は其頃毎日圖書漁りをしてゐた頃で、書庫を有たない私は、玄關に隣る室に多くの圖書を置いてゐた。さてそこが傾いて取崩しを要すること、なつて困つたのは、書物の置き場の無い事であつた。一時大隈會館に預ける外方法が無いので、そこへ自動貨車で移した書物箱は二百程もあつた。會館も災後取亂してゐたので、置き場の工夫がつかず、假りに置かれた所が、老侯の書齋であつた。私は始め其の置き場を知らなかつたが、數日を経て會館を訪うて、どこに置いてあると係員に尋ねると、案内した所が侯の書齋であつて、ドアを押して入ると、箱が一杯に積み累つてゐて、それが爲めに室内が闇くなつてゐた。私は其時置き所もあらうに、假りとは云へ、妙な處へ入れたものだと思ひながら、一種の快感を覺えた。こゝは老侯が終日客を延いて談論された、尤も紀念すべき室である。自分も幾十百回此室で老侯の聲

歎に接した。併し夢にも自分の寄せ集めた書物が此の書齋に宿借りすることがあらうとは思はなかつた。全く不思議な因縁である。私の多くの圖書の中には老侯の趣味に適かなふものもあつたが、一冊と雖も老侯に示す機会が無かつた。それがゆくりなく全部老侯の椅子の側面に堆かく積まれた。老侯の英靈、若し此の室に在すとすれば、一舉、萬餘の藏書を老侯の覽に供したやうな氣もする。コンな事は全く偶然で、企ても出来ないことである。假令ひ數日間でも一たび老侯の書齋のものとなつたことを思ふと、何となく喜ばしく、且つ感激に堪へなかつた。地震と大隈會館と私は不思議な縁因があつて、大震災の刹那は書院にゐた。そして書物は書齋に宿り、後數年を経て、全部の書物を賣却に附した入札場も亦會館であつた。

墨に謝するの詞

私の日々磨する一笏の墨は使用に堪へぬ程短くなつた。此の墨は、本年の初、鳩居堂で購つたもので、長さ四寸許りの分厚のもので、價は僅かに五圓、勿論上等のものでない。墨は割合

に長壽のものであるから、價を吝むべきものでないと思ひながら、いつも安い墨を購ふのが例で、心竊かに我が吝なるを嘲けると共に、己れのごとき惡筆に佳墨は不要と辨疏してゐる。一年一笏の墨、それがどれほどの役をなしたかと見るに、毎日幾通かの手紙、毎日の日誌、幾んど日々筆作する雜録の外に、往々人に頼まれて拙毫を揮ふ。隨筆を書く原稿が便箋で約千枚。此外雜誌や新聞社などに依頼された原稿が若干。一切萬年筆と洋筆を用ゐない私が、これ丈のことをなしたのは偏へに一笏の墨の働きである。細書には墨は多く要らないが、揮毫となると一寸や二寸の墨を費さなければならぬ。書家の眞似事をやるのは墨に取つての大厄である。此の災厄を避ける爲めに近來揮毫には支那製の墨汁を用ゐはじめた。畢竟墨を惜しむからであつて、自分の仕事に墨が大なる援助を與へてゐることを思ふと、之れを惜しむの情無きを得ない。今別を告げるに臨み、其の成績をた、へて謝意を表さざるを得ない。それと共に少からず惡書、惡文、惡著を出したことを慙ぢる。

附
載

市嶋春城翁の『頼山陽』

内田魯庵

市嶋春城翁の『頼山陽』は近來最も人氣ある名著である。小説を除いて此の如く人氣があるは誠に少なく、又人氣があるのも不思議で無いほど興味に富んでをる。小説を除いて此の如く面白く讀ませる著述は滅多にあるものではない。小説以外の著述を滅多に覗いた事の無い文學青年で、偶然之を讀んで面白さに堪り兼ねて有頂天になつて激賞止まなかつたものが私の交遊内に有つた。

附
載

凡そ年齒の長じたものゝ作は如何に苦辛した著述でも生彩を缺いてゐる。學術的や思想的に勝れたものはある。考證的に貴いものや趣味的に面白いものはある。が、人氣を吸集するものは容易に求められない。年長者の著述を面白く讀むのは年長者で、壯齡者は感嘆し或は敬服しても面白く思ふものは無い。丁度老優の技は感服させられても牽付ける力はないやうなものだ。

春城翁の名著を我々が讀んで嘆賞するのは少しも不思議は無い。が、若い者までも牽付けて人氣を高くとるといふは誠に異數である。春城翁が老來益々冴えて壯者の意氣を横溢するを知るべきであるが、春城翁の著常に必ず人氣を呼ぶのではない。翁の近什は少くも私の知る處で『蟹の泡』と『藝苑一夕話』と『大隈侯一言一行』と三部あるが、最後のものを除き前二著は今度の『頼山陽』と多少ドコかで共通する所がある風流傳であつて、相當面白く一部に讀まれ、現に私の如きも暫らく机右を離さなかつたが今度の『頼山陽』ほど盛んな人氣を呼ばなかつた。之といふのは前の二著は翁の博覽の産物であるが、今度の『頼山陽』は縱令時代を異にするも何十年間傾倒沉潜して殆んど相識の友の如く、所謂足駄を履いて其の腹中を駆け廻る心肝肺腑の底の底までも究め抜いてゐたから、山陽に就て語る恰も自己を語るが如くで、生氣が全幅に溢

れて讀者を牽付けずには措かない。翁は座談の雄。圓轉滑脱の中に機鋒を藏して聽者を擒縱するの妙を究む。翁は政治に奔走する何十年間、演壇の鬪將として雄辯を以て鳴る。が、演壇に立つて數百人乃至數千人を對手に長廣舌を掉ふよりは數人の小集に得意の風流を縱談横談する處に翁の本面目が現はれ、滾々盡きざる博通と快辯とが愈々冴えて讀者を煙に巻き酔へるが如くならしむる。如何に平凡の家常茶飯的話柄も翁の口頭に上る時は忽ち精彩を生じて活き／＼とする。翁の座中に在る恰も枯木花咲き三冬煖氣を生ずる趣きがあるので、群客自づからに牽付けられて翁の周圍に集まり、翁は常に座談の中心となる。圓滑にして俊爽、恬淡にして辛辣、機智縱横、諷諭百出、翁の座談は天下一品の稱がある。『頼山陽』は恰も翁と相對して此の巧妙な天下一品の座談を聴くの感がある。戸籍調べや履歷書か

ら初める傳記の從來の型を破つて、丁度フィルム劇が先づ登場俳優の素顔を映寫する如くに山陽自身を引張出して素面を讀者にお目見えさせる。翁の巧妙なる話術は先づ讀者と顔馴染にさせてからソロ／＼と牽込む。翁の座談の緩急調のリズムは句々章々に現れて聲を聴くやうである。最も得意の壇場に入る時は紅を潮して破顔する翁の會心の笑聲が紙面から聞える。翁が竹田の描いた山陽の肖像を評して、山陽に親炙して何も波も腹に這入つてゐる名手の筆であるから活氣が自づからに漲つてゐると云つたは、其儘移して翁の山陽傳の評語とする事が出来る。

此の竹田の山紫水明處に主客相對酌する圖は本書發行後愛讀者から寫眞を送られた由で増訂版に挿入されてゐるが、山陽の面目と生活を偲ぶべき好畫圖である。暫らく此の小影を熟睞して瞑目すると竹田と代つて春城翁が山陽と對座款談する別畫

附 載

圖が眼裏に泛んで来る。翁と山陽とは時代を異にしてゐるが、恐らく翁は山紫水明處に主客對座する會心の場面を夢寐の中に幻想する事があらう。翁が山陽を語る殆んど自己を語る如くであるは嘗だ何十年來山陽に傾倒して、山陽に就て細大究めて知らざる處が無いばかりでなくて、山陽と翁とドコかで共通默會してゐる處があるからであらう。山陽は儒を以て起つて操觚に隠れたが、念々國事を憂ひて大義を唱へて止まなかつた。翁は今こそ讀書風流に韜晦してゐるが、本と政治に志ざして曾ては議政壇の候補を争つた事もあつた。山陽は儒を任じながら句を摘み章を授くる師たるを喜ばなかつたが、經學文章は自づから門下に俊髦を集めて松陰鰐水等の異才を輩出した。翁は學者を任せず教育家を以て處らなかつたが、永く早稻田に席を置いて教壇にこそ餘り立たなかつたが諸生を董沐し、早稻田三長老の一人として推され

てをる。山陽が翰墨の技を以て鳴り書畫骨董にも亦暗からぬは翁の傳ふる通りであるが、翁も亦筆札に長じ遒勁雅馴は儕輩の推す處である。好事の趣味に造詣し且醜酬するは山陽以上であらう。就中翁と山陽とは一が青州從事たれば一は醴泉の大守、中山千日の酔も足らざるべく、翁が山陽の酒を談ずるや山陽の酒曆よりは春城先生の灘の禮讚を聽く感がある。若し夫れ酒中の三昧境に入つて品詩折花の風流に陶然たるに於ては翁と山陽と何れぞや。山陽若し存在するなら翁と相見て天下の英雄は使君と操のみと云ふならん。翁も亦恐らく、山陽と時を同うして生れて相共に對酌して伊丹の美釀を談ずる事が出来なかつたを終生の恨事とするであらう。

山陽傳の批評は春城論となつた。が、昔しから其友を見て其人を知れといふ如く、言に生ける友ばかりでなく會心の故人を見て其人が解る。況ん

や其生涯や業績を月且し品藻するを聽けば言者の品性や習癖や好尚も亦自づから彷彿される。等しく山陽を評するにも翁と蘇峰氏と故思軒とは各々看方を異にするので三人三様の批評は各々各自の面を照らすの鏡とする事が出来る。が、夫は扱置いて山陽は何たる多幸の文人であらう。近代文人中山陽ほど多く評されたのは無い。其の尤なるものだけでも前記の翁と蘇峰氏と故思軒とに加ふるに木崎氏の著がある。小篇零冊斷章片楮まで拾ひ上げたら一部の山陽書史を作るは決して難く無からう。雲耶山耶の吟ぜられるは枯れすすきや籠の鳥どころではなからう。日本外史の賣れ高は恐らく今の人気小説家の作の全部の賣れ高を合算したよりも多からう。人氣は眞價を決定する唯一の尺度にはなるまいが亦決して眞價を裏切るものでも無い。少くも人氣を沸騰させる魅力が著書にも人物にも有るのは争はれない。

山陽は既に論じ盡されてゐる。著書も人物も評價は略ぼ一定してゐる、外史の文章が漢文として成つてをらんでも歴史として出鱈目の小説野乘に過ぎなくても、外史の日本文學史に於ける位置は動かすべからざるものがある。又山陽の性格に幾多の缺陷があつて意外な暗黒面を持つてゐても、丸裸としても相當に値踏みされる一廉の人物であつた事は争ふ事は出来ない。

人氣のあるものは必ず半面に敵がある。判官最負といふ言葉があるほど人氣のあつた義經の花やかな成功を嫉妬するものが有る事無い事尾鱗をつけて觸れ散らしたのが後の世までも傳へられたのであらう。廉塾に於ける青年山陽の不品行の如きも、義經の艶聞と違つて較や信すべき根據があるやうであるが、矢張山陽の後の人氣が招いた反感から若い時代の暗黒面が抉り出されて吹聴されたのであらう。縦令事實であつても青年時代の所

謂若氣の過ちは後の業績と相殺して左して咎めるに足らないのは、若い日吉丸や藤吉が盜賊の居候をしても金の持逃げをしても後の太閤の偉業を毫も累するに足らないやうなものだ。

一體人氣は圓滿無礙の聖人や君子には湧かないものだ。多少の不良分子があつて面白味のある人間で無ければ人氣は生じないものだ。人氣は魅力であつて徳望ではない。徂徠と仁齋と比較して、仁齋の學徳人品は徂徠の敵では無いが、徂徠の方に人氣があつて護國は堀河塾の凡才庸器と違つて俊撃奇才が雲の如く集まつた。山陽時代の儒林を見渡して、小竹は市塵があつてホコリ臭く履軒は田臭があつて喰足らず、敬所は朴念仁で對手にならず、一齋は固苦しく懺堂はマジメ過ぎ、栗山は官僚臭があり、中齋は物騒である。見渡した處、多才多能往く處として可ならざる無く、時務に通じ世事に精しく、慷慨氣節あつてシカモ風流を解

し、詩を品し畫を談する清遊の友とすべく、醉歌亂舞の濁遊にも亦宜しき八面玲瓏の高才は山陽一人であつたといふも甚だしい最貧眼で無からう。山陽が廉塾の不良少年であつたといふは必ずしも山陽の偉器を傷つける話では無い。維新の元老が青年及び壯年時代は敢て云はずもがな、老年になつてさへ屢々有らぬ噂を立てられたのは渠等の成育時代の空氣が悪い習慣を興へたので、渠等の環境を多分考慮して斟酌しなければならぬ。古今の偉人傑士は大抵各々多少の程度を異にした不良少年ならぬは極めて少ないので、聖人君子と云はれた人たちの生ひたちにさへも不良の事跡を残したものがあつた。思慮未だ定まらぬ少年時代の多少の不良はワザ／＼洗ひ立てして咎めないでも目をねぶつて知らぬ振するが古人に對する禮儀であらう。

但だ一つ聞棄てならぬは山陽は利殖に精しく幾

記は手紙が唯一の資料である。幸ひ山陽は筆豆で無数の手紙を残し、しかも生前からの崇拜者が多くて斷簡零墨も大切に保存された爲め、故思軒及び木崎氏が手紙を基礎として傳記を著述したに係らず、春城翁は別に遺墨を採訪して二氏が使用したのよりもヨリ以上の豊富の資料を集める事が出来た。此間の苦辛は喩ふべからざるものがあつたらうが、シカモ此の苦辛は山陽癖の翁が楽しんで満喫する處であつた。但だ之だけの資料を累積するには一通りで無い長い歳月を要したのは當然で、翁の著述的氣根の耐久は眞に驚くべきものがある。シカモ之だけではマダ満足出来ないで、發刊後僅に一年を経た第六版には其後收得した材料に由て復た新たに百頁を追補してをる。翁の山陽研究慾はドコまで行つても留まる處を知らないものである。

翁の研究は徹に入り細を究めて學者著述家とし

附 載

分かシミツタレであつたといふ説である。が、富を卑しみ財を語るを不義とする封建の學者として苟くも殖利に觸れる逸話を残したといふは不似合であるが、土地の投機や株の賣買に熱中したり家賃や地代の取立てに忙がしく銀行の預金の利子を勘定して楽しむ學者が珍らしくない今から考ふれば擧げざるがものは無い。山陽をして今に在らしめば國家の功勞者として少くも貴族院議員（山陽最貧には不足だらうが）ぐらゐにはなれるだらうし、理財の才幹からは會社の重役ぐらゐにはなれやう。此の學者でもあり又理財家でもあるといふ點が亦幾分か春城翁に共通する。

由來學者や文人の仕事は書齋で營まれるから其の生活や行實の社會的に顯はれるは少ないのを常とする。隨つて傳記を編まうとすれば昵近者に質すか或は交友間に往復した尺牘に頼る外は無いので、時代を距て、昵近者の多くは亡びたもの傳

て造詣や業績や見識や態度から日常細事まで萬遍なく行渡つてをる。門人某の筆録を基ゑとして猫騷動まで記述するに到つては如何なる些事をも見のがすまいとする翁の細心を知るべきである。資料の豊富なものと、洞察の犀利なると、一言一行一舉手一投足までも洩らさず記したのは恰もボスウエルの筆に酷似してをる。女弟子細香との風流韻事の如き、酸いも甘いも噛分けた苦勞人の翁ならでは容易に窺ふ事の出来ない極めてデリケートの機微にまで穿入してをる。恐らく翁の最も會心の一章であらう。

最後の山紫水明處を訪ふの記は畫龍點睛の一篇無韻の長詩である。叙景、咏嘆、感慨、懷想、情臻り筆隨つて綿々の餘韻盡きる處を知らない。讀畢つて暫らくは鴨漕の水莊に魂馳せて古人を懷ぶの情に堪へない。劇以上、小説以上に人氣を呼ぶのも不思議は無い、近來最も興味ある好什である。

春城漫筆終

昭和四年十二月十八日印刷
 昭和四年十二月廿一日發行
 (春城漫筆) 定價貳圓五拾錢

著者 市島謙吉
 東京市牛込區東五軒町三十五番地

發行所 不許複製
 發行所 石野元藏
 東京市牛込區榎町七番地

印刷者 竹內喜太郎
 東京市牛込區早稻田

發行所 早稻田大學出版部
 (振替 東京一三二三四三
 名古屋二二四〇〇
 大阪六八九〇〇)

刷印社會式株刷印清日

市島春城著

隨筆春城六種

趣味讀本たると同時に人生哲學

いかさま隨筆、ゴシップ雜文の横行する現代に於て、正に著者の隨筆は卓拔。著者は稀有の人情通、藝苑通、史實通、圖書通、政治通、等々であり而も縦横透徹の見識を語るに圓熟玲瓏の話術を以てする所、眞に天下獨歩である。銷夏新秋の高級讀物とのみ見るは當らず、就いて無盡の教養、趣味の啓發を享け給へ。

目次大要

- (一)感興深き追憶
- (二)檀窓舊夢談
- (三)圖書その折々
- (四)趣味談採餘
- (五)意外録
- (六)衝口發

大隈侯一言一行 市島春城著

三六判五四〇頁
寫眞版多數入 稅價 二・三〇

四六判六百頁
總布函入美裝
定價貳圓八拾錢
郵稅拾貳錢

東牛 京込 早稻田大學出版部發行 振替 東大 京阪 一八六九 三〇〇

市島春城著

春城隨筆

面白い隨筆を讀みたい人は先づ第一に本書を讀め!

讀書界の人氣を沸騰させ、幾萬の讀書子に深い感銘を與へた『隨筆賴山陽』の著者、春城先生が現代隨筆界の最大權威たることはいふ迄もない。事實、著者ほど博覽にして多方面の趣味に通じた者は尠かろう、本書はこの多方面の趣味を最もよく表現したもので、機智縱横、諷諭百出、筆鋒愈冴えて讀者をして酔へるが如くならしめる。眞に天下一品の隨筆集である。

目次大要

- 上篇 雅俗相半録——婦人の決闘——元祿義舉の隠れた後援者、切支丹珍話、掏摸の著述、金貸し東叡山、縁切寺、以下百十數項。
- 下篇 趣味談叢——寺は趣味の淵藪、茶人の趣味教育、反古趣味書簡の區趣味、百本蒐集談、酒趣百則、以下十數項。

四六判五五〇頁
總布函入美裝
定價貳圓八拾錢
郵稅拾貳錢

東牛 京込 早稻田大學出版部發行 振替 東大 京阪 一八六九 三〇〇

市島春城著

春城筆語

隨筆文學の極致、愈々絶妙

著者の隨筆に關してはおのづから定評あり呶々を要しない。本書は著者が漫興に驅られて筆を弄したもので、例の如く趣味談紙上に横溢し、世事に就ての觀察は奇警の内に眞理を寓し、その輕妙の筆は讀者をして卷を釋く能はざらしむ。著者の詩人的才藻と廣汎なる趣味性とは最も此書に發揮されてゐる。收むる所「漫興偶錄」「人物雜觀」「明治初頭文壇の回顧」「烟霞游記」「車上縱談」「百道樂」の六篇、著者が既刊の隨筆に較べて愈々出でて愈々妙を感せしむる。

四六判四二五頁
總布函入美裝
定價貳圓五拾錢
郵稅拾貳錢

京東 振替 行發部版出學大田稻早 〇〇九八六阪大

市島春城著

隨筆賴山陽

▼本書は何故、無際限に賣れる？

(一)材料は著者が四拾年間苦心蒐集したもの、而も從來の著述中に漏れた斬新な材料を網羅したこと(二)山陽に對する褒貶的態度を超越して其人間味を赤裸々に表したること(三)隨筆體に面白く描き、どの頁を讀んでも趣味津津たること、などが主なる理由であらう。今回更に新發見の材料に依る記事八十餘頁及珍奇な寫真數葉を添加した。殊に竹田が寫生した山陽竹田對座の圖は山陽の肖像畫として眞に天下一品である。

三六判七二〇頁
口繪多數入美裝
定價參圓
郵稅拾貳錢

版新訂增

京東 振替 行發部版出學大田稻早 〇〇九八六阪大

市島春城著

藝苑一夕話

三六判全九百頁
總布函入美裝
價各貳圓參拾錢
郵稅拾貳錢

(上下二卷)

▼江戸文人詩客の逸話集

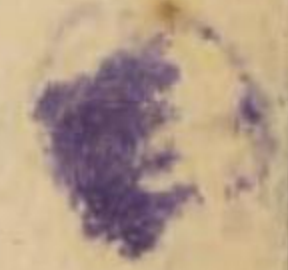


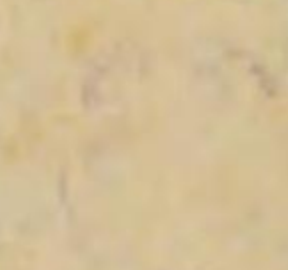




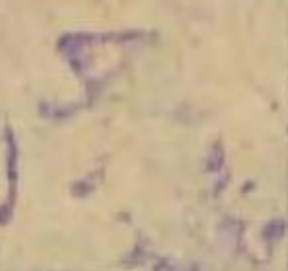





本書は『蟹の泡』の姉妹篇とも言ふべきもので、それが西洋の逸話を集めたのに對して、これは日本藝苑の逸話集である。即ち江戸文化が頂點に達して幾多の文人詩客を輩出した文化文政時代に於ける「ツムヂ曲り」の人の逸話を中心としたもので、無邪氣で而も極めて味のある珍談は、一度手にすれば一氣に讀了せしめて了ふ底の魅力がある。

東京 早稲田大學出版部 東京 一六八〇
東京 一六八〇

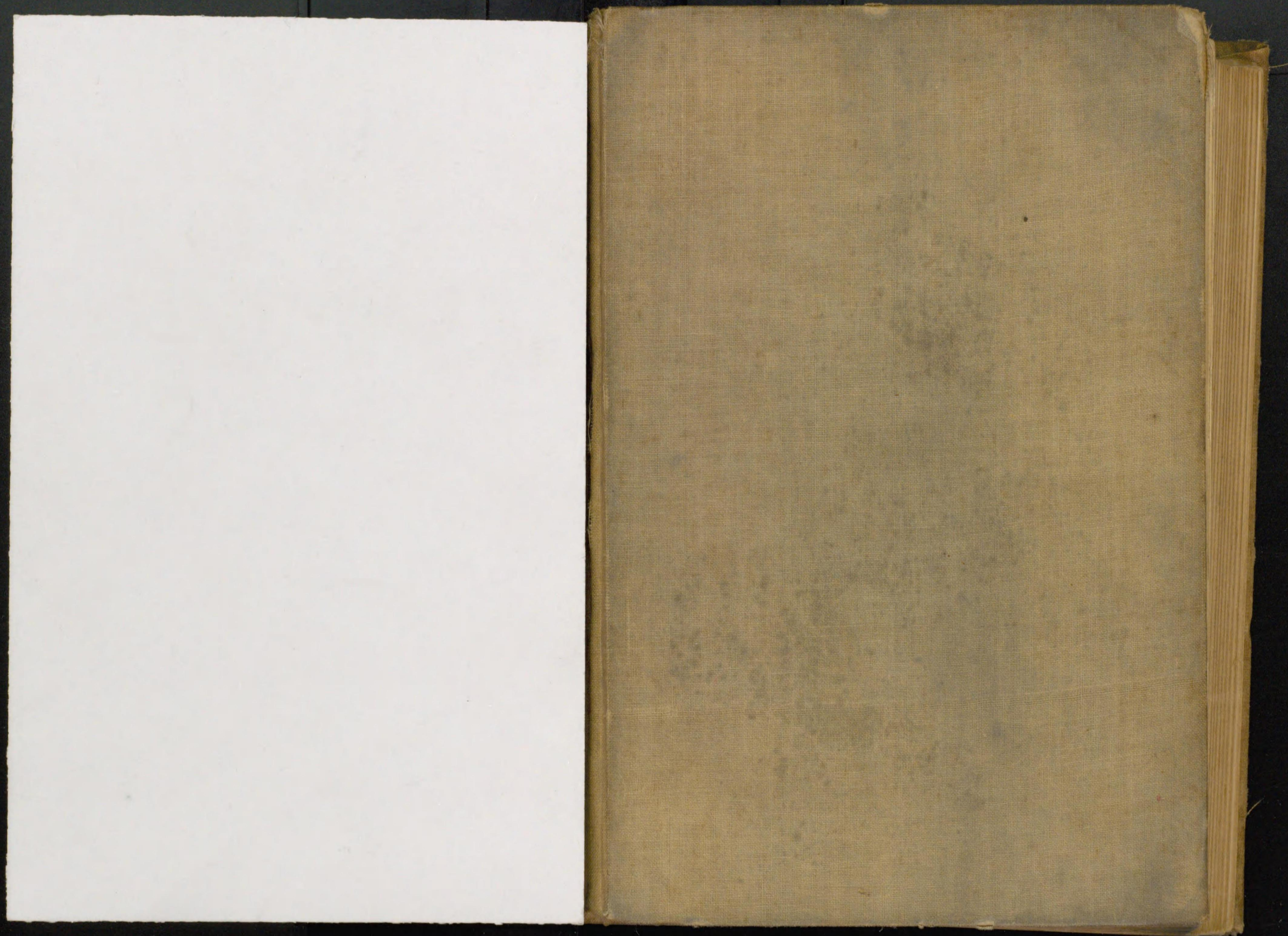
595
164

5年 / 月21日

48

調查濟

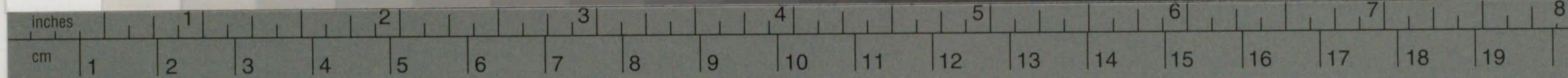


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

